

# 森文政期における修身科口授法の採用とその教育観的背景

——実物・教具としての教科書観と「儀範」としての教師観——

The Reason or Background of Adoption of Oral Instruction in Moral Education  
(*Shūshin-Ka*) under the Policy of Arinori Mori, the Educational Minister.

麻 生 千 明

Chiaki Asoh

## 本論文の課題

明治以後の修身科教授法を概観してみると「学制」期、「改正教育令」期、森文政期（「第1次小学校令」期）、「第2次小学校令」および「教育勅語」公布後、井上文政期、教科書国定化以降、という具合にめまぐるしく、しかもかなり明瞭に口授を方針としたり教科書を重視したり教授方法が変転を遂げている。その背景としては基本的に教育政策の展開があり、それに政策当事者の教育思想、方法観、また教師や教科書の状況等々様々な要因が相互に絡みつつ作用していたと考えることが出来よう。

私は前稿<sup>(1)</sup>において、修身科においておむね口授法が支配的であったことのひとつの要因として、学級編成の側面に焦点をあてて考察した。すなわち明治10年代の「合級」編成および20年代の「単級学校」という支配的学級編成形態が数級（数学年）ないし全校合同による修身口授実践の条件、背景をなしており、それが30年代以降の「講堂修身」ないし「講堂訓話」として確立定式化していく伏線をなしていたことを指摘したのであった。

ところで前稿において私は、「修身科教授において教師の口授に依るべきか教科書に依るべきか」という問題は、森文政期を中心とする一時期熾烈な、かつ時代を通じての論争問題ともなった<sup>(1)</sup>ものであること、しかもその問題は特に「教育方法における教師や教科書の位置や役割をめぐる主として方法観、方法原理に関する問題であった<sup>(1)</sup>」と指摘しつつもそのことの論証は課題として残したままにしておいた。したがって本考察は、まさにその課題への取り組みという意図に立つものである。

状況認識を媒介としつつ、自身の教育観を基底に教師による口授（「談話」）を修身科教授法の方針とした初代文相森有礼の時代において、従前の書籍法と口授法の得失をめぐる論争が教育雑誌上最初に展開されていることに着目し、本稿では森文政期における修身科教授法を主要な考察対象とした。すなわち森文政期の修身科教育に

における口授法採用の論拠およびその教育観（教師観、教科書観）的背景、授業の実態等が主要な考察点であるが、その「前史」的背景として森文政期以前の「学制」期、「改正教育令」期の修身科教授法についての概観から行っている。

前稿でも述べたように、修身科教育史に関してはこれまで、教科書、教材分析を中心とする内容史について多くの優れた先行研究を有しており、教育方法についての多少の言及もなされているが、授業展開における教師や教科書の位置、役割、両者の関係、その背景としての教師観、教科書観など、要するに授業の構造、ダイナミズムに着目しての方法史的アプローチは手薄で、今後の重要な研究課題と考えるものである。

なお修身教授の実態等に関し、弘前市立図書館所蔵の和徳小学校関係の貴重な生資料を利用させて戴いた。謝意を込めて付記しておきたい。

## 1. 森文政期以前における修身科教授法

### 1. 「学制」期における口授法の導入と実施

明治5（1872）年8月公布の「学制」第27章には、下等小学・上等小学に設けなければならない教科のひとつとして「修身 解意」をおいているが、その具体的実施法については翌9月に制定された「小学教則」に規定された。それによると下等小学8級から5級まで「修身口授」が設けられることとなり、第8級と7級は「一週二字<sup>(2)</sup>」即二日置キ一字 民家童蒙解童蒙教草等ヲ以テ教師口ツカラ緩々之ヲ説諭ス<sup>(3)</sup>、第6級は「一週二字 勸善訓蒙修身論等ヲ用ヒ教師之ヲ講述スルヲ前級ノ如シ<sup>(3)</sup>」、第5級は「一週一字 性法略等ノ大意ヲ講授ス<sup>(3)</sup>」と規定された。ここに挙げられている『民家童蒙解』（青木輔清著 明治7年）、『童蒙教草』（福沢諭吉訳 明治5年）、『勸善訓蒙』（箕作麟祥訳 明治4年）、『修身論』（阿部泰蔵訳 明治7年）はいずれも当時欧米に出回っていた修身

書ないし法律書を翻訳した、いわゆる「翻訳教科書<sup>④</sup>」として特徴づけられるものであり、内容的にもおもむね西欧市民社会の道徳、キリスト教倫理に基づくものであった。また木版刷りという印刷技術の未発達な当時、印刷部数も限られていたという事情もあるが、それら教科書は教師が「説論」ないし「講述」する際の参考書として用いられた、いわば教師用教授書といった類いのものであり<sup>⑤</sup>、生徒が各自所持していたというわけではなかった。

「ギョウギノサトシ修身口授」という学科名にも示されるように「学制」期の修身教授は教師の口授を主体とするものであったが、「夫レ口授ノ普ク世ノ学校ニ実践セラル、ヤ輒近ニ及ヒ初テ見ル所……<sup>⑥</sup>」とか「彼ノ欧米教育ノ主義我邦ニ入り政府ハ既ニ学制ヲ布キ教育ノ改良ヲニ内部ニ及ハントスルヤ率先者ハ揚言シテ曰ハク今日ノ最大急務ハ教授法ノ改良ニアリ教授法ノ改良ハ講読法ヲ廃シテ口授法ヲ採ルニアリ<sup>⑦</sup>」との叙述等にも察せられるように、この口授という方法は、明治に入って従前の講読主体の教授方法に代わる欧米の近代的教授法として紹介導入された、移入的側面をもつものであった。

口授法の移入性ということについては藤田昌士氏が、当時の師範学校創設事情、教育雑誌、翻訳教育書等による紹介といった諸側面に焦点をおいて明らかにしているところであるが<sup>⑧</sup>、なおここで翻訳教育書の1、2例を紹介してみたい。例えば米人チャールズ・ノルゼントが1872年に著わし、それを和蘭人ファン・カステールが訳し明治9（1876）年7月文部省より刊行された『教師必読』という翻訳教育書があるが、教授法に関し叙述した「第八章 口授教法」のなかで「但要略書ヲ用キテ全ク書中ノ文章ヲ暗誦セシム<sup>⑨</sup>」る法と「生徒ヲシテ一人ト雖モ亦書冊ヲ携ヘシメス唯談話ヲ説示シテ生徒ヲ感発セシメントス<sup>⑩</sup>」る「口授教法」との各々の長所と弊害を指摘し、「能ク其中ヲ取り相斟酌スル者即チ巧ニ彼ノ二法ヲ合セ制スル法<sup>⑪</sup>」こそが完全なものであると論じている。すなわち教科書講読法に代わる口授法という方法を提示しつつも「口授教法ハ之ヲ何レノ時ニ用キ何レノ処ニ施スモ全ク其書冊ニ代用スヘキモノニ非サルコトヲ認識セサル可ラス<sup>⑫</sup>」と述べ、口授法を適用すべき場合について次のように述べていることは注意を要するところと言えよう。「是唯其書冊ヲ用キテ課業ヲ授ルノ際或ハ其意義ヲ解釈シ或ハ其旨趣ヲ広博ニスル用ニ充ツヘキノ法ノミ 然レトモ甚タ幼稚ナル児童ヲ教フル其最始一時ノ間ニ於テハ特リ口授教法ノミヲ用キルヲ可トス然レトモ猶一ニ説話ニ流レサランコトヲ務メヨ<sup>⑬</sup>」

また米人デヴィッド・ペーキンズ・ページが1872年に刊行した原著を和蘭人ファン・カステールが訳し明治9

（1876）年12月文部省より刊行した『彼日氏教授論』も有名であるが、「心意ヲ醒起スル事」との見出しのもと「教師ノ稍々其業ニ練達スルモノ生徒ヲシテ深沈有益ノ感覚ヲ発起セシメント欲セバ特リ書籍上ニ局ス可カラズ別ニ教フ可キモノアリ<sup>⑭</sup>」と述べ、その一法として「凡ソ学校中ニ於キテ一日一回数分時間ヲ限リ之ヲ普通演習ノ時トナシ生徒ヲシテ各々其平生ノ課業ヲ舎キテ一齊ニ直立セシメ而シテ教師之ニ事ヲ陳述シ生徒ヲシテ一心注視セシムルモ亦一好法トス<sup>⑮</sup>」と述べられている。単に教科書の講読に終始するのではなく、時に生徒に質問を試みたり教師が口授（陳述）したりすることが生徒の注意を惹き「心意ヲ醒起」せしめる「好法」として推奨されているのである。

このように「学制」期における口授という方法は欧米の移入という面を多分に有するものであったが、しかし日本において全く前例のない新奇なものというものでなかった。すなわち山本哲生氏が指摘<sup>⑯</sup>しているようにわが国近世においては日時を定めて一般に「談義」あるいは「聴聞」などと称される庶民教化が行われていたのであり、「この伝統的な方法が明治に入っても流れ込んだ<sup>⑰</sup>」と考えられる面も否定できないのである。移入性と伝統性ということは明治以後の教育方法を貫ぬく基本的特性と言えるであろうが、口授法に関しても、直接的には欧米のその紹介移入されたものと言えようが、その実践的先例は日本の過去にもすでにあったとする認識が伴っていたと理解されるのである。例えば「学制」期以後は森文政期において口授法が盛んとなるが、その時期の教育雑誌記事中、口授法実施上の注意を述べたなか「教師の言語は不敬ならず鄙猥ならず珍奇難波ならず平易純正にして幼童の耳に入り易く彼の道に鳩翁<sup>⑱</sup>など云へる先哲が昔日心学講談と称して道学上の事を解説するか如くなるを要す<sup>⑲</sup>」（傍点引用者）とある。わが国近世の石門心学講談が、口授法の模範的先例として挙げられている一事にも上述のことが確認されるであろう。

ところで生駒恭人は「学制」当時を回顧して「小学教則に、修身口授の課目あるも、其実際に於ては、之を課することなくして怪まず<sup>⑳</sup>」と述べているが、それに察せられるように文部省制定の「小学教則」はそのままストレートに全国各府県で実施されたのでは決してなかった。全国各府県における修身教育の実態については、これも藤田昌士氏の研究が明らかにしているように<sup>㉑</sup>、文部省制定「小学教則」とは別個に、翌明治6（1873）年5月に師範学校（同年8月に「東京師範学校」と改称）においても「小学教則」が編成され、各府県「小学教則」の殆んどは後者に準拠するものであったという。ところでその師範学校制定「小学教則」においては修身は独立

教科として設けられておらず「読物」の教科で修身書等が読物教材として与えられるなど未分化な形で包摂されていた。さらに同「教則」の明治8（1875）年の改訂で「口授」という教科が加設され、修身教材もこのなかで実施されることになった。したがって文部省「小学教則」の「修身口授」が必ずしも全国小学校が実施されたというわけではないが、いずれにしても「学制」期の修身教育は教師の口授を主体とするものであったことは否定できないことである。

そのことと関連して注目されることは、「学制」期において口授という方法に対応したような修身教科書が発行されていることである。例えば明治8（1875）年7月に文部省より『小学修身口授』なる教科書が発行されている。表紙に「漢加斯底爾」とあるようファン・カステールの訳で、内容は19編の独立した小話（寓話、例話）から成っており、有名なイソップ物語なども含まれている。全体的にキリスト教倫理を根底にした個人道徳の色彩が濃厚な点、文部省「小学教則」に掲げられた翻訳修身教科書の性格と連なるものであるが、全編を通じて著者が第一人称の人物として親しく児童に語りかけるといふ説話形式をとっていること、行文、表現ともに平易で情趣性に富んでいること、題材も児童の身近に採られ、挿絵も豊富であるなどまさに児童用かつ口授用を企図して作成された教科書とみられる点で注目される可言えよう<sup>94</sup>。その他『下等小学修身談』（福井孝治 明治11年）、『啓蒙修身談』（ウェイランド著「道徳科学要綱」を神鞭知常が訳したもの 明治11年）など明らかに口授用を意図した教科書と言える。なお10年代に入ると、同じく口授用を意図しつつも明治期の孝子、節婦の美談を集録した『小学口授明治美談』（山住才三 明治11年）やわが国忠孝臣子の美談を集録した『小学口授修身談』（永田方正 明治12年）など「改正教育令」期に顕著な、儒教主義的傾向を示す教科書がすでに刊行されつつあることも注目に値する可言えよう<sup>95</sup>。

なお明治10（1877）年には『小学口授要説』と銘打つ教授法書も刊行され、口授法についての理論的啓蒙もなされている。例えば同書においては次のように口授法に拠るべき根拠、理由が説かれている。

「其口授ヲ以テ教育上頗ル有益ノ術トスルモノハ他ナシ凡ソ何等ノ事業ト雖モ心身ヲ疲労スル修学ノ務ヨリ甚キモノナン是ヲ以テ世間修学勉勵ノ為ニ生命ヲ鬼籍ニ投ズルモノ往々之レアリ殊ニ小学生徒ノ如キ読書ニ従事スルモ唯口ニ字句ヲ誦スル耳ニシテ更ニ其意旨ヲ解得スル能ハザレバ毫モ自心ニ感得スル所ナシ故ニ其患害ヲ将来ニ予防シテ而シテ感覚力ヲ興発セシムルモノハ口授方法ヨリ捷徑ナルハナン<sup>96</sup>」

続いて「小学口授教法要旨」と題して口授法実施上の留意点を15箇条列挙している<sup>97</sup>。例えば「口授ハ務メテ事理ヲ暗記シロ弁洩滞ナカランコトヲ要ス」（第一条）とか「説話ハ総テ愉快ニ之ヲ談」（第二条）すべきこと、「機ニ投ジ変ニ応シテ須ラク適切至当ノ事件ヲ談シ其思想力ヲ激発セシム可」（第三条）きこと、「談話中ノ言語ハ殊更明瞭簡易ニシテ幼生ノ耳ニ入り心ニ感ジ易スカラシメンコトヲ務メ決シテ方言漢語鄙野高尚ノ語ヲ吐クベカラズ」（第四条）、「談話中ハ容儀端正ニシテ直立或ハ椅子ニ凭リ決シテ教場内ヲ徘徊スル等ノコアル可ラズ」（第五条）、また談話中「緊要ノ所」に至れば「生徒ヲシテ判断セシメ以テ其意向ヲ問フ可シ」（第七条）と問答を狭むなどして生徒に主体的判断を求むべきこと、「記憶了解セザルモノアラバ反覆説明ス可」（第八条）くも、説明を繰り返す際は「言語ヲ改ムヘカラズ」（第六条）、また地名、人名等の固有名詞は黒板に板書したり、題材によっては画を用いるなどして記憶を確実ならしめる（第九条）などの注意事項が述べられている。そして下等小学1年から4年までの各学年に対応して教材例が4課で編集されている。こうした内容をもつ本書は「学制」期における修身口授の理論書であり、かつ口授用教科書、参考書であると言えよう。

このように「学制」期において修身科は口授法で行われ、口授法についての欧米の紹介、理論的啓蒙もなされてはいる。しかし全般的動向として開化啓蒙、知育重視、欧化主義を方針としていた「学制」期においては修身科自体があまり重視されていなかった時代であり、拠るべき道徳理念、用うべき教科書について確固たる方針の未だ確立されていない時代であった<sup>98</sup>。したがって明治10年代に入り、明治12（1879）年の「教学大旨」を契機として儒教に基づく徳育教化の方針が示され、翌13（1880）年の「改正教育令」によって修身科が筆頭教科として最重要視されるようになると、儒教理念を盛り込んだ修身教科書の編集と授業での使用が重視され、口授法から教科書教授へと方法が容易に転換していくこととなる。方法意識の昂まりを背景としての、書籍法との比較における口授法的方法的長所の認識を伴っての口授法の採用は、後述するように森文政期に至って初めてみられると言えよう。次に「改正教育令」期の修身科教授法について考察しておきたい。

## 2. 「改正教育令」期における教科書重視の方策——教科書の「熟読暗記」の強調——

明治12（1879）年の「教学大旨」、翌13（1880）年の「改正教育令」公布を契機とする儒教主義に基づく徳育強化策のなかで、特に修身科についてはその教育内容と

関連して教科書の重要性が強調されるようになる。そのことは当時の文部卿福岡孝悌が府県学務吏員を招集し明治15(1882)年5月に行った教科用図書に関する次の「訓示」に端的に示されていると言えよう。

「凡テ普通教育ノ要タル純良ノ国民ヲ養成シテ国家ノ福祉ヲ図ルニアレハ普通教育ヲ施スニ当リ殊ニ教育上主要ノ器械タル教科書ヲ選択検査スルニ此趣旨ニ基キ苟モ国憲ニ背戾セルコトヲ登載スル書籍ノ如キハ固ヨリ之ヲ斥除シ務メテ純良ノ国民ヲ養成スルニ足ルヘキ書籍ヲ充用スルコトニ注意スヘシ即チ修身科ノ用書ノ如キ最も重要ナルヲ以テ過般文部省ヨリ府県ニ交付セン小学修身書編纂方大意ニ準拠シテ選択上殊ニ慎重ヲ加フヘキハ勿論従来交付セン調査済教科書表中ニ於テ不問ニ付シタルモノト雖モ該編纂方大意ニ抵牾スルモノハ務メテ之ヲ斥除セサルヘカラス……」(傍点引用者)

文部省はすでに「改正教育令」を公布した明治13(1880)年に、省内に調査局を設け、従来使用してきた教科書の多くについて使用禁止の「通達」を出すなど<sup>四</sup>、教科書への国家的統制を加えつつあったが、その一方で「純良ノ国民ヲ養成」すべく標準の修身教科書の作成も併行して行った。その際に、上記「訓示」中にもあるように「小学修身書編纂方大意」に準拠する形で教科書の編纂が行われていくことになる。

ところでこの「小学修身書編纂方大意」は、明治15(1882)年12月、文部省が府県学務吏員を招集した際に文部卿より内示されたもので、以降(「改正教育令」期)の修身教授の理念、内容、方法、教科書編纂の骨子は、全てこれによって規定されていくことになったという点で、極めて注目すべき資料である。全部で20箇条より成るが、以下内容の要点をみていくことにしよう<sup>四</sup>。

先ず第十一項には往時(近世)より今日に至る教育の推移を概観して、「往時」(近世)は「道德ヲ主トシテ知学ニ及バズ」という状況であったが、明治に入り「近時教育」(学制期)は「芸技ヲ先ニシテ道德ヲ後ニス。各偏スル所アリ、蓋シ時勢ノ然ラシムル所」と捉えつつ「今日ニアツテハ道德ヲ先ニシテ知学ニ次ギ、必ズ一ニ偏スル可ラズ。是其修身ヲ以テ、諸科ノ最第一ニ置ク所以ナリ。」と「改正教育令」において修身科が筆頭教科に位置づけられ道德教育が重視されるようになった時代の雛勢、必然性を述べている。そうした論旨は「教学大旨」と全く同様といえよう。

ところでその徳育の方針、修身教育の基づくべき理念的根拠についてであるが、第一項において、わが国は「万世一系ノ皇基」である「国体」を明らかにし、もって「其尊王愛国ノ心ヲ養成スルヲ以テ一大主脳」となすべきであると国体主義を基本に、さらに儒教主義でもっ

て補強している。すなわち「道德ノ主義ヲ定ムルニハ、主トシテ父兄ノ信用スル所、子弟ノ最モ敬重スル所ニ着眼セザル可ラズ。」と述べ、そうした観点から「我中国世以還上下ニ通ジテ一般ニ其勢力ヲ得タルハ、則チ儒教ナリ。」と断言する。そしてその儒教たるや確かに「漢土ニ仮借スル者」には相違ないが、しかし「皇国固有ノ道理ト緊接密合シテ、以テ久ク我風化ノ開進ヲ輔翼シ、重要ノ枢機ヲ占メ、盛大ノ影響ヲ現ハシ」たものであるとの認識を示しているのである。そうした主張と関連して、欧化主義は採るべきでない次のように述べる。

「輓近欧米凡百ノ学芸我國ニ入り、尋テ其修身学科ヲ伝ヘシモ、流布未ダ広カラズ、信用甚ダ切ナラズ、且我國ノ欧米各国ニ於ケル土地風習固ヨリ異ニシテ、邦制事情亦自ラ同ジカラザレバ、彼ノ修身学科ヲ踏襲シテ之ヲ我普通小学ノ教育ニ専用スルハ、方柄円鑿相入レザルノミナラズ、到底弊害ノ多キヲ免カレサル可キナリ。」

さてこの「大意」で注目されることは、上述した如き修身科教育の方針のもと、その教授方法および教科書の編纂方針について詳述していることである。先ず方法についてであるが、第二項において「児童ハ眼界狭窄知見偏小ニシテ、思惟ガ未ダ十分ニ暢達セサルガ故ニ……」との児童観、児童期の理解のもとに「修身ノ主義ヲ講ジ、明德ノ道理ヲ究ムルハ中学以上大学ノ区域ニ在リ、小学ニ在テハ、只幼穉ヲシテ入徳ノ門戸ヲ認デシ、道德ヲ信用敬重セシムルヲ要トス。」と小学校段階における修身教育のあり方、留意点を述べる。それは具体的には次のように格言の記憶の重視ということになる。

「小学修身ノ教訓ハ畢竟涵養ヲ主トスルガ故ニ、其臨時会得感悟ノ用ニ供スルコト能ハザルモ、多ク聖賢ノ格言ヲ記得セシメバ自然ニ其涵養ヲ助ケ、其省察ニ資シ、又事ニ臨ミ断決ヲ取ルノ基礎トナルベシ、且後來、中学ノ修行ヲ欠ク者ト雖ドモ、事ニ当リテ、其格言自ラ開導ノ用ヲ為スベシ。」(第七項、傍点引用者)

ここにある如く、まさに「聖賢ノ格言ヲ記得セシメバ自然ニ其涵養ヲ助ケ……」との方法観、方法意識のもとに修身科教科書の編纂の必要はもとより「修身教科書ハ生徒ヲシテ之ヲ暗誦セシムベシ。」(第十五項)と「暗誦」が方法上強調されることになる。

このように教科書の格言の「暗誦」ということを基本としつつ、小学校児童の各学年段階に応じた教授方法について、第十二項に「初等科第一学年前期ハ、口授ニ止ム。初等科ノ口授ハ、修身書中ニ掲載シタル聖賢ノ善行、若クハ嘉言ヲ取り、勉メテ平易ノ語ヲ用ヒテ之ヲ演ジ、粗ヨリ精ニ及ボスヲ要ス。」と口授法実施上の注意を述べている。次いで第十三項に「初等科第一年後期ヨリ口授ニ雜ユルニ読書ヲ以テス。」と述べており、初等

科第一年前期は専ら口授で、以後は口授と教科書誦読の併用で、という方針がこれによって確立したとみることが出来よう。しかも注目されることは「小学ノ修身科ハ誦読ト口授トヲ兼用スベシ、其誦読ノ為ニハ必ず教科書ヲ編纂シ、口授ノ為ニモ亦之ヲ編纂センコトヲ要ス。」（第十四項）と誦読、口授のいずれのためにも各々教科書編纂の必要を説いていることである。

ところでその教科書の編纂方針についてであるが、「本邦聖賢哲ノ嘉言善行ヲ選撰シ、之ニ漢土聖賢ノ言行中ニ於テ特ニ我風教ヲ裨益スベキ者ヲ摘撮シ、参伍取舍シテ修身教授書ヲ編纂」（第四項）すべきであると基本の方針を述べているが、さらになお口授と誦読の併用といった教授方法との関連において、修身科教科書は「聖賢ノ嘉言」のみを収載して誦読暗記に資せしめる一方、「善行」は別録として口授用参考書とすべきであると次のように述べている。

「修身ノ書ハ固ヨリ嘉言善行並ヒ挙グルヲ宜シトスト雖ドモ、小学ノ修身教科書ニ善行ヲ記セントスルニハ、二ノ障礙アリ一ハ善行ハ嘉言ニ比スレバ、其紀事ノ文、或ハ冗長ニシテ、為メニ書冊ノ紙数ヲ増スノ患アリ。二ハ古人ノ言行著名ニシテ、典籍ニ存スルモノ、或ハ偏奇スル所アリテ、往々中庸ニ適ハザル者アルノ患アリ。故ニ今此ノ修身教科書ヲ編成スルニハ、専ラ聖賢ノ嘉言ヲ挙ゲ、生徒ヲシテ之ヲ暗誦セシム、其善行ノ如キハ之ヲ別録トシ（但シ適当ナル嘉言ヲ雜ユルモ亦可ナリ）口授ノ用ニ供スルヲ以テ宜シトス。尤モ口授ノ参考書ハ教科書ト異ナレバ、漸ヲ以テ巻帙ヲ増積スヘシ。」（第十八項）「口授ノ参考書ハ、古人ノ嘉言善行併セ取ルベシト雖ドモ、首トシテ善行ノ人聰ヲ聳動シ、善心ヲ感発スベキ者ヲ採輯スベシ、」（第十九項）

「学制」期における修身教科書は、教師の口授のための参考書、教師用教授書という性格であったものが、「改正教育令」期に至っては、この「小学修身書編纂方大意」に示されるように「暗誦」の重視とも関わって生徒各自が所持する教科書様式となり、これによって生徒用修身教科書が発足したと考えることが出来るが<sup>24</sup>、なお言えば、上に指摘の「嘉言」中心の誦読暗記用教科書と「善行」中心の口授用参考書の分化は、のちに制度化されるところの生徒用教科書と教師用教科書の分化的成立の伏線をなすものとみることが出来る<sup>25</sup>。

この時期の代表的修身教科書として、当時文部省教科書編輯局長をしていた西村茂樹<sup>26</sup>を中心に作成され、明治13（1880）年4月に刊行された『小学修身訓』（全二冊）を挙げることが出来る。この教科書は倫理上の名句、格言を『論語』『孟子』『中庸』『礼記』『大和俗訓』『初学訓』『六論衍義大意』『西国立志編』『勸善訓蒙』

『北土達路日（ベスタロッチ）』『亜地孫（エジソン）』など日漢洋にわたる様々な書物から集録し、学問、生業、立志、修徳、養智、処事、家倫、交際の8項目に分け編纂したものであった。西洋の書物からの引用も多く、個人道徳に関する徳目もみられる点、「学制」期の翻訳修身教科書の性格から完全に脱したものとは言い切れないが、全般に儒教的倫理が大幅に盛り込まれている特徴は隠せない。これは文部省より発刊された基準書の如く見做され、当時出版された民間の修身教科書中には、これに類似の編集によるものが多かった。

ところでこの教科書の冒頭「凡例」には、「修身学ノ書ハ宜シク生徒ヲシテ熟読暗記セシムベシ。其意味深遠ニシテ、幼年生徒ノ理会スルコト能ハザルノ語アルモ、常ニ之ヲ記憶シテ忘レザル時ハ、年長ズルニ随ヒ。漸々其意味ヲ了解スルコトヲ得。一生ノヲ用フルモ尽スコト能ハザル者アラン。」<sup>27</sup>（傍点引用者）とあり、「熟読暗記」「記憶」ということが強調されている。さらにまた「童子ヲ教フルハ、嘉言善行並ビ教フルヲ宜シトス。此書ノ如キモ初メハ善行ヲ記スノ意アリシガ、紙数ノ増加シテ課業ノ便ナラザランコトヲ恐レテ之ヲ止メ。善行ノ如キハ一ニ之ヲ教師ノ口授ニ委託ス。」<sup>28</sup>と「嘉言」を中心に編集し、「善行」は別録として教師の口授に委ねる方針が示されているなど、先程の「大意」の趣旨に沿うものと言えよう。

そもそも西村は、修身科に関して「学制」期に支配的であった口授法には異論を唱えていた人物であり、明治10（1877）年4月に文部大書記官として第二大学区を学事巡視した報告書において修身科に関し次のように述べていた。

「方今小学校ノ修身ノ教ハ只教師タル者ノ口授ニ留マリテ其他ニ及ハス欧米ノ小学教則中ニハ大抵神教ノ一科アリテ或ハ經典ヲ暗誦セシムル者アリ或ハ神歌ヲ歌誦セシムル者アリ或ハ之ニ修身口授ノ一科ヲ加フル者アリ其力ヲ修徳ノ道ニ用フル至レリト云フヘシ本邦ニテハ修身学ノ根基トスル者ナキカニ方今教員ナル者ハ其中或ハ浅学短識ノ少年ニシテ自己ノ品行モ修マラス道徳ノ理ニモ通達セサル者アリ此ノ如キ教師ノ口授ノミヲ以テ修身ノ科日ヲ済マセントスルハ甚タ危殆ナルコト云フヘシ」<sup>29</sup>

さらに西村は、明治13（1880）年7月に発表した「修身の教授法を論ず」との論文においても、修身科は口授法のみに依るのでなく教科書が重要であることを種々の観点から主張している<sup>30</sup>。

ところで文部省は、先程の『小学修身訓』を修正拡充して明治16（1883）年から17（1884）年にかけて『小学修身書』『初等科之部』6冊、同「中等科之部」6冊、

『小学作法書<sup>91</sup>』3冊の三種類の教科書を刊行しており、この頃に至って、ようやく教科書が学年段階別に編集されつつある状況を見ることが出来る。『小学修身書』『初等科之部』の首巻は小学初等科第一学年前期用のもので、本書冒頭の「教師須知六則」のひとつに「一 此書は。古語俚諺及び和歌等を集め録して。小学初等科第一年前期修身口授の用に供するものなり。<sup>92</sup>」と述べられているなど、初等科第一年前期は口授に止むとする「大意」の方針に対応するものといえる。但し「一、児童の初めて学に就くものは。未だ文字を知らざるもの多きが故に。修身の学科の如き。唯教師の口授のみに止まるとはいへども。書中記する所の古語俚諺等は。つとめて是を暗記せしむべし。但し其前に記したる小引は。暗記せしむべきものに非ず。……本巻は。同科第一年前期。口授の用に供するものなれば。殊に字数行数を定めず。<sup>93</sup>」と暗記用教科書ではないとしつつも、書中の古語俚諺はつとめて暗記させるよう勧めている。

さてその教科書内容の一端を紹介すると、本文最初の頁に「人としては。穉き時より。父母に孝をつくすことを以て、第一の勤めとすべし。父母に孝なるものは。自ら其外の事にも道あるものなり。<sup>94</sup>」との「小引」の文章に続いて大字で「孝は。徳のもとなり。孝経」と『孝経』の句が暗記用として載せられている。

『小学修身書』に掲載された名句、格言の出典は、全巻を通じて『孝経』『論語』『孟子』『詩経』『礼記』『中庸』『大学』『小学』というように中国の儒教書が圧倒的多数を占め、それに『鳩翁道話』『道二翁道歌』『心学道歌集』など日本の心学系統のもの、『大和俗訓』『古今集』『養草』など日本の書物、諺、和歌、忠臣孝子の伝記など専ら和漢に限定されており、『小学修身訓』にみられたような西洋人の人名、書名、格言などは全て姿を消している。その点も、より一層「大意」の趣旨に沿ったものになっていると言えよう。

初等科第一年後期よりは、「口授＝雑ユルニ読書ヲ以テス。」との方法に対応して教科書も生徒の暗誦向けに作成されている。すなわち一年後期に使用する「巻之一」以降については冒頭の「教師須知八則」に「一、此書は。古人の名言を輯録したるものなれば。小学童生をして。常に之を暗誦せしめ。以て徳性を養ふの資とすべし。<sup>95</sup>」と暗誦を企図して編集したものであると述べ、したがって「第一巻は。一日に二行以下。其他は。大抵二行半程授く。<sup>96</sup>」と一日の授業で授くべき文章の行数までもを規定している。なお「一、此書は。童生の務めて暗誦せんことを要すといへども。是固と其徳性を養はんがために。斯くせしむるものなれば。教師たるものは。其力を唯暗誦の教授のみに用ひず。善く童生平生の言行に注意

し。成るべくは。編中の語を引証して。是を証し。非を戒め。駆て而して善に之<sup>(7)</sup>かしむべし。<sup>97</sup>」と暗記を基本としつつも教師の臨機的な教材の活用、敷衍化を奨めているのである。

この『小学修身書』を標準としつつ当時は多くの民間発行の修身教科書においても、誦読用教科書を「嘉言」中心に、また口授用教科書(参考書)を「例話」中心に、と別々に編集作成していく傾向がみられた<sup>98</sup>。このように誦読と口授の併用という教授方法を取りつつも、基本的に教科書が重視され、教科書中心の授業が展開されたという点に「改正教育令」期の修身科教授法の最大の特徴を求めることが出来よう。

## Ⅱ. 森文政期における修身科口授法の採用とその背景

### 1. 教科書教授への批判と口授法の採用

「学制」期の口授法の支配から、明治10年代の「改正教育令」期の教科書重視への方針の転換についてみてきた。それが森文政期に入ると再び修身科は教科書を用いず専ら教師の「談話」に拠ることとなる。すなわち森文政下の教育内容、方法について規定した「小学校ノ学科及其程度」(明治19年・1886年5月、文部省令第8号)は「修身科」の教授方法について次のように規定している。

「小学校ニ於テハ内外古今人士ノ善良ノ言行ニ就キ児童ニ適切ニシテ且理合シ易キ簡單ナル事柄ヲ談話シ日常ノ作法ヲ教ヘ教員身自ラ言行ノ模範トナリ児童ヲシテ善ク之ニ習ハシムルヲ以テ専要トス」(第10条)<sup>99</sup>

このように修身科は専ら教師の「談話」によるべく、教科書を用いない方針とされたのである。森文相自身さらに翌明治20(1887)年5月に小学校修身科は教科用図書を採用しないよう視学官、地方長官宛「通牒」を発しており<sup>100</sup>、それに対応しての地方各府県の動向もみられる。例えば千葉県では早速同年同月(明治20年5月)県令74号をもって森文相の「通牒」の趣旨を県下に周知させるとともに、同月17日には訓令137号をもって「教科用図書ヲ用ウルニ及ハサル旨発令候処右ハ教員ニ於テ口授若クハ筆記ノ方法ヲ以テ教授可致義ニ付生徒ヲシテ一定ノ図書ヲ購求セシムルハ不相成義ト心得ベシ<sup>101</sup>」とその理由を補足説明している。

ところで何故に森文政期において修身科は教科書を用いずに専ら教師の「談話」によることとされたのであろうか。「森文部大臣は歴代文相のうちで最も強く自らの思想を表明しては、これを施策に反映させていた<sup>102</sup>」とも指摘されるような森文政期の教育政策の特質から、何よりも先ず森自身の思想、教育観が中心的に問われなければならないであろう。およびそれに緯となり経となっ

て関わってくる当時の状況、また世論、教育論議等総合的にみていく必要があろう。そうした念頭のもとに以下口授法採用の理由、根拠を順次考察していくことになるが、先ず挙げられることは適切な教科書の欠如という状況およびそのことの認識であったと言えよう。端的に『教育制度発達史』に次の如く述べられている。

「従前より修身科にも教科書を使用するのが普通であったが、当時適当なる教科書も尠く児童に取り比較的難解な書物を用ゐ、字義の説明が主となって修身の本旨が隠却せられるという弊害があったので、文相森は修身科に就ては必ずしも教科書を必要とせず、寧ろ用ゐざるを可とするの方針を取り明治二十年五月視学官をして地方長官に対し修身科の教科書を採定せざるやうとの趣旨を通牒せしめた。<sup>64)</sup>」

ここに指摘されているような修身教授の実態批判は、明治10年代後半期における「各府県年報」、文部省吏員による「学事巡視報告書」、および教育雑誌の学事報道等において均しくなされてきていたことであった。例えば明治16(1883)年の「長野県年報」には「修身科ノ授業最モ末々其宜シキヲ得サルハ痛嘆ニ堪ヘサル所<sup>65)</sup>」と述べられ、その理由として教科書の文字、内容の難解さがあげられている。明治17(1884)年の「福島県年報」には「修身確言中<sup>(77)</sup>字句高尚ニ過ギ往々学級(「等級」のこと…引用者註)ニ相当セサルアリ<sup>66)</sup>」とあり、また同年の「福岡県年報」にも次のようにある。

「是迄主トシテ用フル所ノ修身書ハ或ハ佞屈贅牙ニシテ文意ノ了解シ易カラス或ハ不適当ノ事実等児童ノ教授ニ適セサルノ嫌アリ故ニ先ツ以テ改良セサル可ラサルモノハ各等科修身書ニシテ……其編纂ニ望ム所ハ文字ヲ平易ニシ意味ノ了解シ易キト又価値ヲシテ可成低廉ナラシムルトニ在ルナリ<sup>67)</sup>」

ここに指摘されているような教科書の実状からも修身科の授業は概ね字句の解釈に汲々たる有様のようであった。若溪会々員柳生寧成は長崎県の状況について「修身科ノ如キハ唯教科書ヲ講談セシムルノミニテ生徒ヲシテ字句ニ徒勞セシムルノ弊アリ<sup>68)</sup>」と報じており、また田中登作は、埼玉県の場合について「修身科ハ口授ヲ用キルノ制ナレバ嘉言善行等ハ教科書ヲ講読セシムルナリ<sup>69)</sup>」と教授法の大要を伝え、しかしてその口授用書が孝経論孟によるゆえに極めて難解で「生徒ヲシテ徒ニ字句ノ釈義ニ苦マシムルノ弊アリ<sup>70)</sup>」と報じている。確かに教科書の難解さは否めなかったもののようである。明治17(1884)年埼玉県令吉田清英が文部省に伺出した資料のなかに、次の如く漢籍に多く典拠した『小学修身訓』は、教師にとっても難解であるとの訴えがみられる。

「從來中等科二級一級ニ用ゐる来りし小学修身訓二冊を

省き刪定家道訓二冊を以て之に代ふモノ理由ハ修身訓者漢籍中之格言を纂めし者なれハ意味深長にして理解し難きのみならず教員ニ於るも往々教ふるに困む者アリ<sup>71)</sup>」

文部省吏員等による学事巡視報告にも、修身科については教科書、教師、教授法と様々な点において「改正教育令」下の「小学校教則綱領」に示された「徳性涵養」という修身科の要旨に程遠い実状が報告されている。例えば明治16(1883)年に大阪府管下を学事巡視した安東清人(文部権少書記官)は、修身科においては初等科6、5級では『修身訓画』を、同4級以上及び中等科以上では亀谷行の『修身児訓』を用いていること、そしてその『修身訓画』について「挿画ノ掛図ニシテ幼童ニ修身ヲ授クルニハ其感動ヲ惹起シ易クシテ頗ル佳ナリ然リト雖モ図中掲載ノ事蹟或ハ小学児童ニ適セサルモノアルカ如シ<sup>72)</sup>」と評したあと、その授業法について、「事蹟意味ヲ口授<sup>73)</sup>」することこそ大切であるのに「初等科ニ於テハ読方ニ頗ル力ヲ消費シ又凡テ口授ノ仕方口写シニ失スルモノ多ク其意味ヲ了解シ徳性ヲ涵養スルカ如キ効用ハ尤モ期シ難キニ似タリ小学教科中最緊要ナル修身科ニ於テ最モ授ケ方不完全ヲ感覺セリ<sup>74)</sup>」と批判している。

明治15(1882)年に鹿児島県を学事巡視した吉村寅太郎(文部権少書記官)もその巡視報告書に「本県小学修身ノ教授ハ読方ノ教授ニ異ナル所ナシ<sup>75)</sup>」と修身教授の実態を伝え、教科書について「中等科ノ読本ハ三字経大統歌論語孟子ト定ムレトモ是レ皆ナ小学校ニ於テ字義句意章意等ヲ授クルニ適セス若シ夫レ彼ノ格言等ヲ記誦スルノ例ニ從フモノトセン乎其教授ノ要旨ニ背戾スルヲ如何セン<sup>76)</sup>」とその難解さを指摘している。明治17(1884)年に埼玉県を巡視した野村綱(文部権少書記官)も「今茲ニ各科ニ就キテ其状況ノ一斑ヲ掲ケン修身科ハ多クハ格言ノ暗誦、修身書ノ訓読等ニシテ更ニ読書科ト徑庭スル所ナシ<sup>77)</sup>」と述べている。同じ17年に福岡県を学事巡視した佐沢太郎も、修身科の授業法について「修身科ノ教授ハ生徒日常ノ躬行ニ敷衍説話スルモノモ亦少カラスト雖モ事実ノ暗記ニ偏スルノ傾アルカ如シ<sup>78)</sup>」と述べており、さらになお教員の実態にも言及している。すなわち、県下小学校教員総数1246名の内訳について、師範学校卒業証書所有者309名(校数比4分弱)、免許状教員1008名(校数比1人2分強)、補助者1593名という実態を示したうえで、「教員ノ学力ハ教科書ニ就キ其誦読ヲ授クルニ足ルノミ<sup>79)</sup>」と教員の学力の実状をも指摘している。そして「碩学老儒ニシテ高等科ノ特許ヲ有シ修身科ノ教授ニ当レルモノ、如キハ頗ル生徒ノ徳性ヲ涵養スルニ足ルト認ムヘキモノアリ但シ授業生等ニ於テハ或ハ授業中ニ机上ニ政談書ヲ披クモノ又ハ不体裁ノ衣容ヲナセルモノヲ見受ケタリ<sup>80)</sup>」とも批評している。

前述したように「改正教育令」期においては儒教主義に基づく修身教科書の編纂と授業での使用を方針としたのであるが、主として和漢の書に典拠した教科書中の格言、文字、文章、内容の難解さ、およびそれに伴う教授法の弊は免がれ得なかったと言える。教科書教授についてのそうした批判的認識が、森文相が修身科において教科書不使用の方針をとるに至った、最も直接的な要因であったと理解されるのである。なお当時の修身教科書についての批判は森文相自身においても次の如くなされている。

「児童の發育の度合如何を弁へず、徒らに古人言行の漠然として六ヶ敷ことを授るは甚不可なることは勿論、中には頗る穿ち過ぎたることありて小学生の脳力には迎も解し得へからざることあり、否これを解し得るも啻に修身の教となすべからざるのみならず、却て之を傷害するものなきを免れず、世間往々論語などを用ゐるものあり、該書の如きは修身書と言はんよりは寧ろ政事書と言ふの穩当なるに如かざるに似たり、尤もさすが孔子の言行を綴りたるものなれば修身の模範となること亦渺しとせざれども、其言たる多くは當時の形勢に應じ又は其弟子の人となり如何を察し説述せしものなれば、之を児童に授くるには其性質如何により須らく注意斟酌をなさざるべからず、要するに今日の修身教科書は総て瑕瑾なきを免かれざるを以て教員の注意最も緊要なり<sup>63)</sup>」(傍点引用者)

数多くの演説のなかで、教育内容・方法への言及もかなり多い森文相であるが、教科書、とりわけ修身教科書についての言及はどういうわけか極めて乏しい。修身教科書についての比較的まとまった意見は上記のものぐらいと思われる。さて上記の如き修身教科書批判を行った森であったが、しかし彼は決して教科書不要論者ではなかった。「文部省ハ簡單平易ナル教課書ヲ敷キ、人々ノ諷誦又ハ講義ニ便ナラシメ……<sup>64)</sup>」との意見をも表明しているのであり、また教科書検定制度を導入するなど教科書の重要性を充分知悉し、それに細心の意を払った人物でもあった。修身教科書に関しても、森文相の秘書官を務めた木場貞長が「森子は修身書の事にも熱中し、自ら某々二氏を指図して、不偏不党の修身教科書を公にしたが、其の後間もなく教育勅語が發布になったので、此の書は広く行はるゝに至らなかった。<sup>65)</sup>」と回顧している程でもある。先程の修身教科書批判についても、「教科書主義への攻撃よりむしろ儒教主義への攻撃と見なされる<sup>66)</sup>」ような要素が強いのであり、反儒教主義という森の思想的立場からする教科書内容への批判が、字句や文章の難解さを指摘する従前からの多くの批判に乗じ、それらと相俟って展開された形ともみられるのである。

「道徳教育ノ進歩セサルハ何故ソ」と題する明治20(1887)年時の雑誌論説があるが、当時の修身教育を批判して次のように述べている。「元來我國ノ道徳教育ハ支那儒教主義ヲ用キ來リシ故修身科用書モ亦儒教主義ニテ充テタル六ヶ敷語ナリ、教員諸君ト雖モ解スルニ難ク到底是ヲ用キテ生徒ノ心ヲ開發スルヲ難クシテ注入スルサヘ困難ナリ。故ニ修身教授ニハ少シモ価値ナキモノナリ。<sup>63)</sup>」

このように儒教主義に基づく教科書の字句文章の難解さを指摘し、加えて「タトヒ充分ニ講説シテ生徒ノ感情ヲ喚起スルモ或ハ男尊女卑ノ如キ今ノ世ニ適セサルモノアリ。<sup>64)</sup>」と内容的にも儒教的モラル自体が時代に適合していないと批判している。このようにモラル内容自体と文字文章等の難解さとをこみで批判する論法など、森文相のそれと似通っていると言えよう。そして「若シ良書ニ乏シキ時ハ専ラ口授ニ依ルヲ可トス<sup>65)</sup>」との同論説の結論に端的に示されているように、適切な教科書を欠くとの状況(認識)が消極的な形ではありつつも口授法を採用するに至る最も直接的な要因であったと言っても過言ではないと思うのである<sup>66)</sup>。

しかし教科書の不適切さということが口授法採用の理由の全てでないことは言うまでもない。ここで注目されることは口授法の方針を明示した文部省令第8号(小学校ノ学科及其程度)公布直後の明治19(1886)年9月、埼玉県尾沢氏提出による論題「尋常小学ニテ修身学ヲ教授スルニ口授ト書籍ニ拠ルノ得失」が『教育時論』に掲載され、その問題をめぐる論争が同誌上に展開されていることである。そうした方法意識の昂まりの中での口授法の採用なのである。次にその論争内容および口授法による修身教授の実態について考察することにする。

## 2. 口授法の得失をめぐる論争と修身教授の実態

### (1) 口授法こそ徳性涵養の良法——心性開発主義の応用展開——

『教育時論』52号(明治19年・1886年9月発行)に上記「論題」への「答案」が掲載されている。それによると答案寄稿者は「山城A. S.」「高知県大岸生」「石見あ. く.」「周南国光義然」「埼玉田島東洋」「同深井多十郎」「同与志汰」「足柄足柄生」「信濃桂里生」「茨城自強不息堂」「山形県山本信孝」「美作大庭要平」「前橋横地多吉」「長崎県村田政寛」の14名で、長崎県村田政寛を除く13名はいずれも口授法支持論であるところに、いかにも口授法優勢の状況を察することが出来る。ところでその論旨であるが、口授法支持の13件の所見は「同一轍ニ帰シ僅ニ大同小異アルニ過ギズ故ニ諸氏所説ノ要旨ヲ取り之ヲ合シテ一篇トナス<sup>67)</sup>」としてひとつにまとめて紹介さ



れているが、要するに口授法こそ徳性涵養の最良法というところに要約出来るようである。

先ず修身科教授の方法として、談話的に口授するのと書籍に依る方法とでは、いずれがより児童の感情を惹起し得るかを考える必要があると述べ、「理論ニ因ルモ実験ニ徴スルモ談話的ノ可ナルヲ確信スルナリ<sup>68</sup>」と結論づける。以下その理由を挙げていくのであるが、先ず書籍に依り講義するときには「児童ハ唯章句ヲ記誦スルノミニシテ少シモ之ニ感化スルコトナカルベシ<sup>69</sup>」「児童ハ文字ニ困シミ事実ヲ了解スルコト難シ<sup>70</sup>」「後日復読シ得ルヲ以テ生徒講義ニ注意スルコト少ナシ<sup>71</sup>」「文字ノ記憶ニ困ミテ快楽ナク好學心ヲ害フ可シ<sup>72</sup>」といった四弊があるという。しかし口授によるときは、以上の弊を免がれるばかりか次の如き利があるという。「児童ノ倦怠ヲ來スコトナシ<sup>73</sup>」「口授ハ善ク其意ヲ尽シテ児童ニ了解セシムルベシ<sup>74</sup>」「感情ヲ惹起スルコト強シ随テ能ク記憶スベシ<sup>75</sup>」「文字ヲ解スルノ時間ヲ省クベシ<sup>76</sup>」「書籍ヲ買フノ費用ヲ要セザルベシ<sup>77</sup>」

強い感情を惹起することによってこそ記憶も強固なものになるという主張は、専らに「熟読暗記」のみを力説していた西村茂樹の教育方法観とは極めて対照的であると言えよう。なお続けて、格言を記憶することとそれの実践とはあくまでも別であると次のように述べる。

「斯ク云ハバ論者或ハ云ハン書籍ニヨルトキハ格言ヲ知り得ベシ多クノ格言ヲ知ルトキハ自然ニ品行端正ナルベシト是レ大ナル誤ナリ彼ノ放蕩者ヲ見ヨ往往才ニ富ミ學ニ長ズルモノアルニアラズヤ如何ニ多クノ格言ヲ記憶スルモ情疑ノ之ニ感化スルニアラザレバ少シモ益ナキナリ<sup>78</sup>」

口授法の書籍法に優る何よりの長所は、生徒の感情に強く働きかけ、徳性を涵養し、実践を促がすところにあるとされた。ところでそうした主張を含む論説記事は、この頃の教育雑誌に多くみることが出来る。

例えば「道徳上ノ智識トハ何ゾヤ」題する『教育時論』の論説においては、道徳上の智識というものは「暗記的智識的」に教えるべきものでなく、まさに感情に訴えるべきである、という趣旨からも口授法が大切であると次のように述べている。「……此德育ノ方便ニ修身口授ヲナスコトアリ、此ノ口授ヲ為スニ當リテハ、前人ノ徳行ヤ、善ヲ談話スルコトアリ、法言格語ヲ以テ教誡ヲ為スコトアリ、然リ而シテ此レヲ為スヤ、全ク感情ニ訴フベシ、以テ良心ヲ引キ起コス可シ、以テ道德力ヲ奨励ス可シ、決シテ暗記的智識的ニ之レヲ教ヘ授ク可カラザルナリ<sup>79</sup>」

「德育管見」と題する小竹啓二郎の論説においては、次のように徳性涵養の方法としては教師の談話ないし感

化こそが肝要であり、書籍は不要であるとまで言い切っている。

「教科書ヲ与ヘテ之ヲ誦読セシメ古聖ノ格言ヤ種種ノ談話ナドヲ問答スル如キ授業ハ多ク之（徳義上ノ智識ニ傾クコト……引用者註）ニ陥ルモノナリ元來幼稚ノ児ガ斯カル書ヲ読ムトキハ其注意ノ点ハ字句ノ読ミ易ク解シ難シト云フ処ヘ傾キ之ヲ試験マデニ暗誦セ子バナラス覺ヘ子バナラスト思フヨリ多少之ヲ厭フ心ヲ起シ同感情ヲ起シテ之ニ感化セラルルガ如キハ甚ダ少ナキモノナリ（是ヲ以テモ德育ニ歡樂ヲ結合セシムルノ必要ナルヲ知ルベシ）且新奇ヲ好ム児童ノ性ナルニ同ジコトヲ何度モ復読サセ問答シ又談話スルヲ以テ却リテ益厭忌ノ心ヲ起サシムベシ故ニ書物ノ功ハ德育上ニマデハマヅ之ヲ皆無ト謂フモ可ナリ<sup>80</sup>」（傍点引用者）

小竹はさらに、修身科は書籍に依るのではなく教師が児童心意の情態に応じて愉快平易に口授することこそ感化の最適方法であると次のように述べる。

「智識ヲ求メ新奇ヲ愛スルハ是児童ノ天性ナレバ少ク教育ノ理法ニ通ズル人ガ児童心意ノ情態ニ応ジ愉快平易ニ修身口授ヲナセバ児童ハ大ニ之ニ感化セラレ其他平生ノ親切ニヨリ教師ヲ父母トモ仰ギテ頗ル從順愛スベキ行為ヲ呈スルコトアリ<sup>81</sup>」

「修身科口授」と題する論説は、当時の講談風に陥っている修身教授の実状を批判したあと、修身教授は教師の談話によるべく、その談話も適宜問答をとり入れてこそ生徒の注意を惹き実践を促がす「道具」にもなると次のように述べている。

「要するに実行せざる修身談は其の価なきものなれば何程骨折りに講談をなし仮令生徒を悉く覚えさせるもこれを实地に行はぬは決して益なきなり況んや生徒に解する能はざるの講談をなすに於ておや然して談話は成るべく問答体となすか宜し問答体となして不注意なる風を矯むることか出来傍ら生徒の容儀をも正すことか出来るべければ修身科の口授には最も適當なるものなり修身科に於て最も重んずべきは実行にあれば口授は実行を促すの道具なりとの考へを忘れてはならぬなり<sup>82</sup>」（傍点引用者）

なおここで注目されることは、児童生徒の注意を喚起し、感情に訴え、徳性を涵養し、実践を促がす口授法は、明治10年代にわが国に導入されたペスタロッチー主義開発教授の影響とも捉えられていたことである。例えば「開發的教授ノ景況如何。」と題するこの頃の記事中、次の叙述がある。

「今実況ノ一ニヲ提記シテ開發的教授ノ有様ヲ觀察スルノ資トセンニ、曩時開發的説ノ盛ナリシ頃ヨリ前日マデハ、小学ニ於テ教科書ヲ用ユルヲ好マズ、可成的口

頭ヲ以テ教授セシメンコトヲ務メタルハ一般ノ様子ナリキ。是レ開発的教授ノ利益アルコトヲ知リタルヨリ出ヅル顕象ナリ。之ヲ云ヒ換フレバ、口頭教授ハ開発的説応用上ニ便宜多ク妨碍少ナク、且注入的教授ニ流レ込ムノ恐ナキヲ認メタルヲ以テナリ。〓」(傍点引用者)

周知のように、開発主義的教育方法は、主として理化方面の教科においては、児童の視覚に訴えるべく実物教育(標品、器械等の使用)という形で展開したものであるが、修身科においては口授という方法が開発主義の応用展開として捉えられていることは注目に値すると言えよう<sup>6)</sup>。明治18(1885)年、文部省御用掛時代の森に随行して学事巡視を行った日下部三之介の「巡遊日記」のなかに「前田某氏の受持修身科の教授ハ開発的教授の旨趣に適へりと認めたり<sup>6)</sup>」とあるが、その修身科授業の様子は、次の如きものであった。

「今其授業の大略を記さんに徳性中勤勉力を養成せんと目的にて題目は勉強と掲げたり其開発の方便ハ該地水災の節巡査が非常に勉強したる有様を問答しつつ其勉強の幾多の効ありしを証し其勉強の点に注意せしめ児童の心に稍々勉強の必要を感じたる時を計りて教師ハ充分に勉強せざるへからざるの教訓を下したりされば児童等ハ皆其意を悟りて勤勉事をなさんと心の奮したるものゝ如くなりし夫れ授業の本旨ハ開発誘導の法によらざるべからず<sup>6)</sup>」

あるテーマ、題目のもとに教師が適切な例話、事実を問答的に「談話」し、最後に「教訓」で締めくくるという授業パターンということができる。「各地ノ小学校ニテ行フトコロノ修身科授ヲ為スヲ見ルニ皆事実ヲ実物ナリ錦絵ナリニ依テ之ヲ説話シ問答シテ終リニ格言ニ之ヲ箝込ムヲ例トス<sup>6)</sup>。」との雑誌記事にも、事実の説話→問答→格言というように授業展開が定式化している様子が窺われる。そうした当時の修身教授の実態について次に和徳小学校関係資料を中心に考察してみることにする。

## (2)「談話」による修身教授の実態——和徳小学校関係資料を中心として——

和徳小学校関係資料のなかに『明治二十二年八月 週間授業予定書 尋常科第四年級』と題する和綴じの資料がある。これは明治22(1889)年8月19日より23(1890)年6月7日に至る尋常科4年の授業の予定と記録で、修身科、読書科、作文科、算術科、習字科、体操科の6教科について各々一週間毎に「予定書」と「授業摘要」とが記録されたものであり<sup>6)</sup>、当時各教科の授業がどのようなテーマのもとにどのような教材を用いてどう展開されていたのかについての概要を知る上での貴重な資料ということが出来る。これによると当時修身科は毎週火、

木、土と隔日に授業が行われており、週毎にテーマを設け、教師がそれに関する様々な例話を説き最後は格言で締めくくり生徒にそれを筆記させるというパターンを確認することができる。例えば9月下旬のある週は「節儉スベキヲ」とのテーマのもと9月28日(土)の「授業摘要」欄には「風落ノ青梨ニテ寒天ヲ作ル等ノ例ヲ挙テ物ニ不用ノモノナケレバ無駄ニスベカラザルヲ説キ格言トシテ節儉ハ富ヲナスノ基ト云フコトヲ書記セシメタリ」とある。採りあげられる例話も様々で、例えば9月中旬は「忍耐」というテーマのもとに「孟子ノ例ヲ説」(9月12日 木)いたり「神崎与五郎ノ例ヲ引テ「伸ビントスルモノハ先ツ屈ム」ノ格言ヲ書記セシメタリ」(9月14日 土)とあるように人物例を出したり、「鉄道工夫ノ実例ヲ以テ「忍耐ハ事ヲ成スノ本」ノ格言ヲ書キ取ラシメタリ」(9月19日 木)などと実に様々な実例がとりあげられている。

さらに若干紹介すると、「節儉」の大切さを教えるのに「水戸黄門ノ惜紙ノ話ヲ挙テ節儉(紙ヲ惜)ノコトヲ告ケタリ」(10月3日 木)とか「油断ノ害」を教えるのに「鹿油断シテ身ヲ失ヒシ例ト船長油断シテ乗客ヲ殺セシ事ヲ告ケタリ」(10月12日 土)とか、「争いを慎むべきことを教えるのに「拙ナキ犬ハ人ニ吠ユト云フ言ヲ書取ラシメテ餘リ人ニ争ヒヨスルハ却テ虚ナルヲ示スニ似タルヲ告ク」(10月24日 木)と吠える犬の例を出したり「原田左馬助、後藤孫兵衛ノ例ヲ引キテ「争ヲ好ムハ真ノ大勇ニアラズ」トノ言ヲ書取ラシメタリ」(10月26日 土)と人物例をあげたりしている。明治23(1890)年2月13日(木)は「小児堤穴ヲ防キシコトヲ挙テ「小害ヲ防カザレハ大害アリ」ノ言ヲ書取ラセリ」と、また2月15日(土)は「大工ノ疵及書生ノ眼病ニツキ例ヲ挙テ「小害ハ防キ易ク大害ハ防キ難シ」ノ言ヲ書取ラセリ併セテ姿勢ノ矯正スベキヲ告ク」などとある。

なお学校内の行事や出来事、偶発事項等も時折題材としてとりあげられている。例えば「教育勸語」の公布に先立って明治23(1890)年の4月11日(金)には「御真影」の奉迎が全校あげて行われているが、その4日後の4月15日(金)の修身時間には、その奉迎の時のことを話題とし「奉迎ノ片唱歌ニテ失敗セシコトニ就テ之ヲ償フニハ学力ヲ以テセンコトヲ告ク」と記録がなされている。奉迎時の唱歌の失敗を償うとの意識で学業に精励すべきことが教師の口から促がされているのである。また同じ年の5月11日(日)には運動会が举行されたようであるが、その直後の15日(木)の修身科では「運動會ニ勝ヲ得シコトヲ告ケ且ツ学業ニモ勝タンコトヲ説ケリ」とあり、学校行事等の出来事が学業奨励の題材に活用されている傾向をみてとることが出来る。

偶発事項をとりあげた例としては明治23(1890)年2月25日(火)の「今日体操時間ニ列ヲ離レシモノ多クアル由ニツキ之ヲ論セリ」、また3月6日(木)の「大成小学ノ惨害ヲ説キ其慈心ヲ惹起ス」というように学校内外のことがとりあげられ訓戒の材料とされている。また日常的な生徒の行為、状況等が授業でとりあげられている場合もある。例えば明治22(1889)年12月16日より21日までの週は「予定書」には「何カ生徒ノ所為ニ從テ告クル見込 但シ此頃ハ往々当生徒ハ悪シキヲナス評アレバナリ」とあるが、そうした予定のもと12月17日(火)は「不潔ニスベカラザルヲ告ク」、また19日(木)は「人見セニセズシテ実力ヲ養フコトヲ告論セリ」と記録されている。また「父母ノ出入ニ送迎スベキヲ及ヒ言葉ヲ戒ムベキヲ告ク」(22年12月3日 火)、「廢物ニ吊ヲツクベキヲ他人ノ廢物ヲ使ハザルヲ何ナリトモ拾ヒシ人モ落セシ人モ直ク屈クベキヲ言ヘリ」(23年5月22日 木)というように学校内外における日常生活上の注意、教誡といった内容も少なくない<sup>64)</sup>。

最後に授業の実際の様子であるが、明治22(1889)年10月7日(木)の記録に次のようにある。この週は三つのテーマを予定しており、この日は「(一)人ニ勝ルト云フ元氣ヲ持ツ」<sup>65)</sup>というテーマのもと「(二)ヲ口授シタルレ教授モ不完全ナルカ知ラ子トモ毎日ノ口話ニ似テ十分ノ六七ハ無頓着ノ如シ」(傍点引用者)と記録されている。「口話」とは校長講話でも行われていたのであろうか、ともかく「十分ノ六七ハ無頓着」と集中性を欠いている授業の実態の一面を伝えている。また授業等で絵画等を活用する場合もあったようで、23(1890)年1月23日(木)の記録に「少女瘡ヲ得タル軍人ヲ憐ミシヲ画ニヨリテ教授ス」とある。

以上、明治20年代前半期の修身科授業の実態を和徳小学校関係資料にみてきたのであるが、当時の教育雑誌記事にも修身科口授の具体的方法上の問題に言及したものも多く、それら資料にも当時の授業の実態や問題点を窺うことができる。特に口授で取りあげるべき人物や格言等に言及したものが多い。

例えば「修身科口授ニツキテ」と題する増山久吉の論説においては、「其格言ハト云ヘハ孝ハ百行ノ本トカ親在セハ遠ク遊ハストカ災ニ六ツカシキ格言ナレハ中々之ヲ生徒カ胸裡ニ覺ヘ込ムニハ余程困難ナルハ余カ目撃スル所ナリ。<sup>66)</sup>」と格言の難解さを指摘したうえで「愚考ニテハ尋常科ノ初級ニテハ(若シクハ上級ニテモ)可成世間ニアリフレタル格言例令ヘハ油断大敵トカ成ラス勸忍スルカ勸忍トカ云ヘル卑近ニシテ生徒カ常ニ唱導スルモノヲ以テセハ可ナラン<sup>67)</sup>」と提言している。

またある記事では「実例ヲ選ブノ標準」として「年齢

恰同ノ児童ヨリス」「通常ノ場合ヨリス」「寓言禽獸及歴史上ヨリセズ<sup>68)</sup>」と児童の卑近な日常生活より選ぶべきであると述べており、またある記事では人物教材について次のように述べている。

「古人ノ言行ヲ録シ小学修身科口授ノ材料ニ充ツルヲ目的トシテ近年粹ニ上リシ書勸カラザレハ皆彼封建時代英雄的ノ談話ニアラサレハ則チ武人的ノ講説ノミ多クシテ此日進月歩ナル実業社会ニ立チ自活自営以テ国ヲ護リ身ヲ修ムルノ良民タルニ恥ヂザルノ品性ヲ陶冶スルニ適當ナル材料ニ至リテハ乏キガ中ニモ実ニ乏キノ限リナリ<sup>69)</sup>」

かく述べたうえでこの論説では、人物教材の条件として「第一、農工商等ノ実業ニ従事シ身ヲ起シタル人」「第二、異邦ノ人ニアラズシテ本邦ノ人ナルコト」「第三、往古ノ人ニアラズシテ近代ノ人ナルコト」「第四、成ルベク児童ト境遇ヲ同クシ年齒ヲ同フスルモノナルベキコト<sup>70)</sup>」の4つを挙げている。

要するに児童生徒にとってより身近な人物を、ということに尽きようが、また歴史上の人物をとりあげる場合でも様々な方法上の工夫が奨励されている。例えば「修身科口授の一法案」と題する記事においては、その人物の死没した年月日を一覧表にして予め教場に掲げおき、その因んだ日にその人物の事蹟について談話するなどの提案がなされている<sup>71)</sup>。

その他「小学修身科ノ格言ニ和歌俳句等ヲ用フルノ可否<sup>72)</sup>」「俚諺ヲ小学校修身科ニ用フルニ付テ<sup>73)</sup>」といった論説記事など、森文政期においては修身科は口授法で行うのが方針とされたのに対応して、教育雑誌上でも口授法の方法的長所から具体的方法論に及ぶまで実に多面的に論説が展開されているのである。

### 3. 口授法を支える教育観的背景

#### (1) 実物・教具としての教科書観

前節において書籍法と口授法の得失をめぐる論争をとりあげ、特にその口授法支持論の内容をみてきた。ところで14名中のひとり長崎県の村田政寛のみは、あくまでも書籍の必要性を主張するものであったが、その内容について紹介しておきたい。彼の主張によると「尋常科生徒ノ年齢ハ十歳未満ノ者多クシテ智力モ亦微弱ニ未ダ無形物ニ就テ其感覚ヲ起スヤ難シ<sup>74)</sup>」という。しかるに「修身科ヲ教授スルニ方リ口授ヲ以テセンカ即チ視官ニヨラズ唯聴官ノ能力ヲ専ラニスル者ナリ<sup>75)</sup>」と批判されることになる。つまり智力微弱な尋常科生徒には専ら聴覚に訴えるだけの口授法では不十分で、視覚にも訴える必要があるということである。また記憶保持のためにも「実形実物」は是非とも必要と主張するのであるが、そのよ

うな「実形実物」の最たるものこそが書籍であるとして次のように述べている。

「夫レ児童ノ快樂心ヲ起スモノ実物実形即チ書籍ニ若クモノナシ書籍ハ徳性ヲ涵養シ修身的ノ目的ヲ達セシムルノ母ト云フモ可ナリ故ニ巧ニ書籍ヲ用テ快樂心ヲ起サシメ又書中ノ図画ヲ見テ其感情ヲ強カラシムベシ」

このように視覚に訴える実物としての教科書という捉え方の上に立って、聴覚のみでなく視覚の面からも徳性の涵養をはかるべく、したがって教科書も必要とする彼の主張は、口授法専一論に対する修正意見の如きもので必ずしも全面的な口授否定論という類ではない。ちなみに彼は「智力発達シテ社会ノ義務交際等ヲ弁識スル高等以上ノ生徒」においては口授法のみでもよいと述べているのである。

かくみてくると、口授法か書籍法かという当時の論争は、必ずしも対立的でない二者択一的な問題へとは発展しなかったとみられる。というよりも従前の文字、文章を主体とする教科書と、それによる「誦読」中心の教授法に対する批判という点ではむしろ共通の立場に立つものであったとも言える。ちなみに視覚に訴える実物の必要ということは13名の口授法支持論者の間にもみられた意見であった。すなわち彼らは次の如く述べていた。

「古今名士ノ写真名所古蹟山水鳥獸花卉ノ図画等ヲ求メ或ハ之ヲ示シテ口授シ或ハ之ニ説ミ易キ格言又ハ咏歌等ヲ記シテ生徒ニ与フベシ是レ一時忘却セシ談話モ之ヲ見テ心中再現スベキ連合物トナリ一旦衰ヘン感情モ自ラ惹起スルニ至ルベシ以上所述ニ因リテ其利害得失ヲ比較セバ口授ノ書籍教授ニ勝ル明ニ知ル可キナリ」

修身教授において視覚面からも効果を上げるべく実物絵画等の使用は、すでに明治12(1879)年の「教学大旨」に附された「小学条目二件」にも示唆されていたが、明治20(1887)年前後にはひとつの主流的論調をなしていた。例えば郡司篤則は「児童ガ平常耳目ニ見聞スル処ノモノ且ツ児童社会ニ行ハルル処ノ言語句調ヲ仮用シテ面白ク談話的ノ教授ヲナシ」すことの重要性を述べたあと次の如く述べていた。

「教師ハ宜ク注意ニ注意ヲ加ヘ可成児童ノ不愉快ナル文字的ノ教授ヲ廃シ修身ノ科ナレバ古今賢哲忠孝ノ人士ノ事ヲ記載セタル小説本ヤ錦絵類博物ノ科ナレバ珍奇ノ草木ヤ各種ノ軍書ヤ伝記類等ヲ教室ニ排列シ教師ハ此ノ実物ニツキニ書籍ニ照シテ最ト面白ク教授ヲナセバ生徒ノ好奇心必ズヤ層一層ニ喜デ之ヲ聞キ容易ク見ニ觀念上ノ智識ヲ開発セシムルヲ得ルベシ」

「小学修身教授法」と題する一論説は、修身教授の実をあげるには「美術的誘導」を加うべきこと、具体的には「物品の授受、書籍の取扱、机案視箱を清潔にし、諸

掛図は可成精美なるを撰び、其他器械は大切に整頓<sup>(ママ)</sup>にし、坐作進退を改め、醜体汚行争鬭の所行を戒むる等<sup>四</sup>」といわば視覚的環境の整備を訴えている。また注目されることは、「修身教授の一方便として幻燈を使用することは現今各地に往々見る所<sup>四</sup>」との学事報道にもあるように幻燈などの視覚機器が修身授業で活用される状況も各地にみられつつあったことである。

こうした視覚重視の動向が、教科書のあり方についても文字、文章主体の教科書から次第に挿絵等を多く採り入れた視覚に訴える教科書への改良という形で表われていくことになるが、そこには、この口授法と書籍法の得失をめぐる論争をもひとつの媒介契機とする、実物としての教科書観の浸透をみることが出来ると言えよう。

先述したように明治10年代において教科書の「熟読暗記」ということを力説していた西村茂樹は、「教育勅語」が公布される明治23(1890)年に「修身教科書ノ説」との論説を発表し、教科書の必要性、重要性を再び強調しているが、その論拠のひとつに「人ニハ耳目ノ両官能アリテ、諸学科(音楽ヲ除キ)皆耳目ノ両官ヲ用ヒザルハナシ。然ルニ殊ニ大切ナル徳育ニ限り、何故ニ目ヲ廃シテ、耳ノミヲ用ヒントスルカ<sup>四</sup>」と視覚(目)利用という観点が新たに加わっていることが特にここで注目されるのである。

このように森文政期における口授法にまつわる教科書観としては、実物としての教科書観ということがひとつ挙げられるが、さらに授業展開における教科書の位置、役割ということに関して、いわば教具・手段としての教科書観ということが挙げられるように思う。例えば「修身課の教授は果して困難なりや」との論説があるが、「何をか最も適当に且つ最も大切な方法といふや。曰く教師の模範なり曰く作法及容儀の修整なり曰く事実の巧みなる説話なり曰く偶発事件に就ての教授なり<sup>四</sup>」と教師自身の模範性および臨機的な説話が何よりも大切であると述べたあと、「蓋し書籍及格言の如きは唯是等の教授を助くるの器械たるに過ぎざるのみ<sup>四</sup>」(傍点ママ)と断じているのである。

さらに端的に、教科書は決して「目的」にあらずして「器具(インストルメント)」に過ぎないと主張する次の如き論説もあった。

「抑学校事業を行ふには種種の要具なかるべからざるは勿論の事にして其尤大なる者を挙げれば生徒を入るる為に校舎を要し之を教授する為に教場を要し教場を整理する為に机卓を要し椅子を要し黑板を要す凡そ是類の所要物は皆教育事業を行ふ為に必ず欠くべからざるの器具(インストルメント)なり而して彼の教科書なるものも亦一種の要具なるのみ世人往往教科書を視ること重き

に過ぎ之を教ふるを以て目的と為すものなきにあらざるれども教科書は教育の為に要する器具にして決して教育の目的にあらざる其教育に対して占むる位置は教場、校舎、机卓の類と絶て異なる所あらざるなり<sup>44</sup>」(傍点引用者)

ここにも指摘されているように日本においては古来書籍を極めて神聖視する伝統が強く、それが明治以後の教科書観としても底流において貫かれていたと言える<sup>45</sup>。それは殊には明治10年代の儒教主義復活期(「改正教育令」期)、明治23(1890)年の「教育勅語」公布後、明治37(1904)年以後終戦に至る国定教科書時代に顕著であったと言える。そうした伝統的教科書観は、修身科教科書についてとりわけ支配的であったとも言えるが、そうしたなかで森文政期においては雑誌上の一論説ではあるが、ともかく教科書の教員性、手段的性格が主張されていたことは注目されることと言えよう。なおこうした手段としての教科書観は、先程の記事にも示唆されるように「儀範」としての教師観と相応じていると言えよう。

## (2)「儀範」としての教師観——森の教師観・修身教授法観——

森文政期における修身科教授法は、文部省令第8号(小学校ノ学科及其程度)に示されていたように方法的には教師の「談話」によることとされたが、さらに「教員身自ラ言行ノ模範トナリ児童ヲシテ善ク之ニ習ハシムルヲ専要トス<sup>46</sup>」とあったように教師自身の日常的な言行において児童生徒の「模範」となり、彼らを感化、薫化していくことが何よりも大切であるとする考え方がその基底にあったと言わなければならない。換言すれば「談話」という方法も、詰まるところ教師自身の人物や言行重視の「教育方法」的表われとも解されるのであり、そこにまた森文相自身の教員重視観、教師論の反映をみることにも出来るのではなからうか。

周知のように国家主義的教育体制を確立するうえにおいて森が特に力を入れたものは、ひとつは国民普通教育すなわち小学校教育の普及であり、それと相俟つところの教員養成、師範教育であった。「小学校令」から「帝国大学令」に至る「諸学校令」のうち特に「小学ノ条例ト師範学校ノ条例トハ務テ先ツ発行センコトヲ要ス<sup>47</sup>」との見解を施策に移した森は、師範教育の重要性について「教育ヲ善クスルニハ先ツ主トシテ教員ノ氣質精神ヲ養練シ、及之ヲシテ専心従事セシムルニ足ル所ノ待遇法ヲ設クヘキ事<sup>48</sup>」とも述べていたし、また埼玉尋常師範学校を視察した折の演説においては「若シ学校ニシテ教員其人ヲ得サレハ、縦令資金饒カナリト雖モ器具備ハルト雖普通教育決シテ其功ヲ奏スルヲ得ス、普通教育其功

ヲ奏スルハ教員其人ヲ得ルニ在ルノミ<sup>49</sup>」とまで言い切っていたのである。森がいかに「教員其人」を重視していたかが窺えよう。

それではその教師のあり方、教師像について森は一体どう考えていたであろうか。彼は第一地方部府県尋常師範学校長に対する演説において、人物養成という課題にふれて「然ルニ茲ニ困難ナルハ人物ハ教員自カラ善キ行ヲナシ其行ノ光ニテ薫陶サル、モノナルニ、今ノ教員タル、人ハ学問ハ即チ芸芸ナリト心得、人物ノ如何ニハ差シテ頓着スルコトナク、歴史ナリ化学ナリヲ教フレハ其人ハ教員ナリト心得ルモノ多シ、成程ソレモ教員ハ教員ナレトモ文部省ノ所謂良教員ニハアラス、教員ハ生徒ノ氣質ヲ薫陶セサレハ良教員ニハアラサルナリ<sup>50</sup>」と述べている。学問を授けるのでなく生徒の氣質、人物を薫陶するものこそ「良教員」であるとの主張である。さらにまた別の演説においては「教員タル者ハ父兄ニ代リテ子弟ヲ薫陶シ十分ノ教育ヲ施シ善良ノ人ヲ養成スルノ重任ニ当ラサルベカラス……吾ニ学校内ニ於テ生徒ヲ教授スルノミナラス、生徒日常ノ事ニモ立チ入りテ懇切ヲ尽サシメ、万端ノ事皆之レカ模範トナリ、相談相手トナリテ出来得ル丈ケノ世話ヲ為スノ氣込ミヲ生セシメサル可カラス<sup>51</sup>」とも述べている。

このように教師の日常的な感化、薫陶というものを何よりも重視する森であったから、修身科教授法に関して「修身教授法ハ難事ナリト雖モ、屈スル所ハ理窟ヲ以テ生徒ヲ誘導センヨリハ己ノ言行ヲ以テ儀範トスルニアルヲ以テ……<sup>52</sup>」「修身ヲ教フルハ児童ノ徳性ヲ養成スルモノナレハ自然ニ感化セシムヘキ事柄ヲ扱ムヘキ<sup>53</sup>」「修身ハ理窟ハ無用ナリ、児童ニ解シ得ヘキ近易ノ事柄ヲ解キ自然ニ感化スルヲ勉ムヘシト謂フ事<sup>54</sup>」と「理窟」を説くのでなく平易な事柄を談話し、自然に感化していく方法を重視しているのである。

文部省令第8号「小学校ノ学科及其程度」に示された修身科教授法は、何よりも森文相自身の、以上みてきたような教員重視、修身教授法観がストレートに反映したものと理解されるが、同様の論調は当時の教育雑誌記事に多くみることが出来る。例えば「修身配当の時間」と題する記事では、森文政期において修身科の週間授業時数が従前より縮小されたが、そのことは決して修身科の軽視を意味するのではないこと、いなむしろ「修身科ノ如キハ如何ニ多クノ時間ヲ配当スト雖モ徒ニ虚文漫語ノ弊ニ陥ラハ毫モ其甲斐ナカルヘク又仮令時間ヲ減削スト雖躬行実践其宜ヲ得ハ敢テ配当時間ノ寡キヲ憂フルニ足ラス<sup>55</sup>」と授業時間の長短よりも教師の普段の「躬行実践」こそが大事と述べている。

同様のことは、京都の和田嘉衡も「校外教授論」との

論説において、教師自身の模範実例による感化は、修身科の授業よりもはるかにその影響力において勝るものがあると述べているが<sup>49)</sup>、そうした主張は、まさに森文相自身が「教室外ノ教育」との呼称のもとにつとに唱導していたことであった<sup>50)</sup>。

また筑前の岡田幾太郎は「児童ノ風儀ヲ矯正スルノ方  
 按」と題して、教師においては日常の「挙動」と「言語」  
 に注意し「世人ノ信用」を得ることこそが最も大切なこ  
 とで「其信用深ケレバ幾分カ授業ノ援助ヲナスモノ<sup>60</sup>」  
 であるが、「之レニ反シテ一旦過テ父兄及ヒ児童ノ信用  
 ヲ失フノアルトキハ遂ニ一般世人ノ蔑視ヲ免カル能ハサ  
 ルハ勿論忽チ授業上ニ非常ノ悪結果ヲ来シ如何程汗ヲ流  
 シ精神ヲ勞費シテ修身其他ノ教科書上ニ就テ談話ヲナス  
 モ彼ノ馬耳東風ノ比喩ト一般ノ理ニシテ敢テ寸益ナキハ  
 自然勢ノ止ムヲ得サル所ナリ<sup>61</sup>」と断じている。また「教  
 育施設上の意見」と題する論説では、「修身教育の骨髓  
 根本たる忠孝節義の心志勇敢耐忍の気象節儉の習慣等<sup>62</sup>」  
 を「振起」せしむるには、「先づ教官の躬行実践せる  
 活模範を示す<sup>63</sup>」ことが「善良なる億万巻の修身書を  
 講読するに勝れり<sup>64</sup>」と主張しているのである。その他、  
 教師その人こそが何よりも修身科の「最良標品<sup>65</sup>」であ  
 るとする主張、「父母教師ノ儀範ハ知ラズ識ラズ、模倣  
 シテ之ニ従フモノナリ<sup>66</sup>」といった主張など類似の論説  
 は枚挙に遑ない程である。

以上、「学制」期以降の修身科教授法を概観するなかで、特に森文政期において口授法（談話）が採用されたことの背景とその実態について考察してきた。すなわち結論を要約すると、背景としては、明治10年代（「改正教育令期」）の教科書教授にまつわる弊害の認識、口授法の徳性涵養に資する方法的長所の認識があり、さらに口授法を支える教育観として、実物・教具としての教科書観、儀範としての教師観がみられたことを指摘したのであった。ところで森文政期に支配的であった口授法も、明治23（1890）年の「教育勅語」公布前後より、口授法批判を媒介に再び「勅語」に準拠した教科書の編纂と使用が方針とされるようになる。そして修身科教授法に関する論争も教科書の問題を中心に新たな様相をみせることになるが、その考察は稿を改めざるを得ない。

## 註

- (1) 拙稿「学級編成論の視点からの修身科教授法（口授法）の考察——「講堂訓話」の成立背景・過程——」（『弘前学院大学・短期大学紀要第19号』1983年3月）
- (2) 「時」と同義。なお翌明治6（1873）年1月8日の文部省布達第1号をもって「小学教則」中の「字」は総て「時」に改められた。（『明治以降教育制度発達史（以下「発達史」）と略記』第一巻（370頁）

- (3) 『発達史 第一巻』 399～402頁。
- (4) 『教科書の歴史』 唐沢富太郎 創文社 昭和31年 55頁。
- (5) 『日本教科書大系 近代篇 第3巻 修身(三)』 講談社 昭和37年 「修身教科書総解説」 571頁。『長野県教育史 第六巻 教育課程編三』 長野県教育史刊行会 昭和51年 478頁。『近代日本教科書教授法資料集成 第五巻 教師用書 I 修身編』 東京書籍 昭和58年 638頁。
- (6) 『小学口授要説』 遠藤宗義 栗田智城 高原徹也 合輯 内藤書屋 明治10年 1頁。
- (7) 「口授法の得失 土方勝一」 『東京若溪会雑誌』 66号 (明治21・7・20) 7頁。
- (8) 藤田氏の指摘によると例えば明治5 (1872) 年4月22日、師範学校創設の準備として文部省が正院に提出した「小学教師教導場建立ノ伺」のなかに「西洋人一人ヲ雇入レテヲ教師」として、その指導のもと「彼ノレツテルハ我イロハニ直シ彼ノオールドハ易ルニ我単語ヲ以テシ其外彼ノ口授講義之法ヲ始メトシテ一切彼ノ成規ニヨリテ我レノ教則ヲ斟酌シ以テ之ヲ其ノ生徒ニ授ク」(『発達史第一巻』 778頁) とある。教具、教授法等一切を外国のものを採り入れる方針が示されているが、そのなかに「口授講義之法」も含まれている。また明治8 (1875) 年3月刊の『文部省雑誌』5号に「独乙教育新聞抄訳 独乙小学校教授ノ景況及論説」が掲載されているが、そのなかに「教授方法ノ種類」について「其方法ニ又種々アリ……或ハ直チニ之ヲ生徒ニ口授スルアリ之ヲ口授ノ教授法ト云フ。」との叙述などがある。(藤田昌士「修身科の成立過程」『東京大学教育学部紀要第8号』 昭和40年参照)
- (9) 註(5)掲出『近代日本教科書教授法資料集成 第一巻』 366～7頁。
- (10) 同上書 368～9頁。
- (11) 同上書 455頁。
- (12) 山本哲生「西村茂樹の道德教育観」『日本大衆精神文化研究所・教育制度研究所紀要第4集』 昭和42年 77～8頁。
- (13) 「道德施設上の意見(承前)」『教育報知』 76号 (明治20・7・23) 6頁。
- (14) 「小学校教育の前途 生駒恭人」『教育時論』 491号 (明治31・12・5) 3頁。
- (15) 註(8)掲出論文参照。
- (16) 『日本教科書大系 近代篇 第1巻 修身(一)』 講談社 昭和39年 「解題」 602頁参照。
- (17) 註(5)掲出『日本教科書大系 近代篇 第3巻』 所収「修身教科書総目録」参照。
- (18) 註(6)掲出書 1頁。
- (19) 同上書 3～5頁。
- (20) 例えば文部省「小学教則」に掲げられた教科書についても「何れも本式に教科書として作られたものではなく、小学校の教科用図書としては必ずしも適当なものとは言はれぬが、他に恰好の書物がないのであるから致し方ない。」(『発達史 第一巻』 417頁) といった事情がまつわっていたのである。
- (21) 『発達史 第二巻』 500頁。
- (22) 明治13 (1880) 年8月30日、文部省は各府県教則記載の教科用図書について調査、「書中小学校教科書トシテ不妥当之条項」あるもの(甲号)、「小学校ニ於テ教授スヘキ性質ノモノニ無之」もの(乙号)、「書中不妥当之条項有之又編書之体裁教科書トシテ不適当ノモノ」(丙号)に分類、それぞれに該当する使用禁止の教科書を指示している。(『発達史 第二巻』 493～4頁) さらに同年12月18日には府県に対し「国安ヲ妨害シ風俗ヲ紊乱スルカ如キ事項ヲ記載セル書籍ハ勿論教育上弊害アル書籍ハ採用セサル様」(同上497～8頁) 通達している。

- 23 以下「小学校修身書編纂方大意」の引用は『近代日本道徳教育史』（安里彦紀 高陵社 昭和42年）81～5頁に拠る。
- 24 註(5)掲出『長野県教育史 第六巻』491頁。
- 25 註(5)掲出『近代日本教科書教授法資料集成 第五巻』の「解説」文のなかに次の指摘がなされている。「誦読と暗誦が求められる修身教科書は、まだ文字を知らない初学の場合（たとえば文部省『小学修身書初等科之部』首巻）は別として、生徒用書としても使用されることが期待されるものであったといわなければならない。他方、「善行」を主として口授用の教科書が別に編纂されるならば、それは「学制」期と同じく教師用書としての性格を持つことになる。教師用と生徒用との区別を明らかにした編纂、また、両者の制度上の区別は後の検定期のことであるが、修身教授における誦読と口授という方法と関連して、両者の区別の必要はすでにこの期に兆していたのである。」（643頁）なお「大意」においては次のように男子用、女子用と性別に応じて教科書を別つべきであるとしつつも、経済上初等科のみは同一で止むをえないとも述べられている。
- 「男子ト女子トハ、本質・品性ヨリ生涯ノ事業ニ至ルマデ、皆同ジカラザレバ、小学ノ修身書ハ、男児ニ用フルト、女児ニ用フルトノ二種ヲ設ケヘシト雖ドモ、如何セン、小学初・中・高等悉ク全国一般ニ男女教場ヲ異ニスルハ、学校経済ノ能ク容ルル所ニ非ザルヲ以テ、不得已初等科ノミハ、男女一様ノ教科書ヲ用フヘシ。」（註(5)掲出書84～5頁）
- 26 西村茂樹の略歴。文政11（1828）年3月13日、江戸辰ノ口の佐倉藩邸に生まれる。天保8年、本藩江戸邸内学校にて読書、習字、槍劍、馬術等を学ぶ。のち佐倉藩温故堂佐授読手伝、正授読、都講を務める。嘉永4年6月、佐久間象山の門に入る。8月、富島流砲術員となる。嘉永5年、木村軍太郎につき和蘭文法書を読み、洋学研究に入る。嘉永6年、海防策を藩主および閣老阿部正弘に上る。文久2年、佐野藩にて政事役主役、藩政改革掛となる。明治2年8月、佐倉大参事、4年11月 印旛県権参事、6年8月、森有礼、福沢諭吉、加藤弘之、西周、中村正直、箕作麟祥らとともに明六社を結成、啓蒙活動を行う。同年11月、文部省五等出仕、編書課長勤務。8年、侍講兼務。9年、宮内省御用掛、2月、文部大参、3月、修身学舎創設。10年1月、文部大書記官。13年3月、教科書編輯局長。19年1月、文部省兼務を免ぜられる。2月、宮中顧問官。20年9月、修身学舎を更に発展させ日本弘道会を創設。21年、華族女学校校長兼務。23年9月、貴族院議員に勅選される。30年、第一高等学校倫理科担任出講。35年8月18日逝去、享年75歳。（『西村茂樹 杉浦重剛』海後宗臣著 昭和12年 北海出版社 所収「年譜」参照）
- 27 『日本教科書大系 近代篇第2巻 修身(仁)』講談社 昭和39年 7頁。
- 28 「第二大学区巡視功程 西村茂樹」『文部省第4年報』47～8頁。
- 29 その要旨は以下の如くである。先ず諸多の学科が教科書や器械を用いて教授しているのに修身科のみが口授法により全然教科書を使用しないのは甚だ不適当である。それでは教師が修身学の全体を尽くし教授することは出来ない、日常の倫理道徳を説くにも前後本末を誤ることが多く、また当時の教員の学力をしては到底東西古今の倫理道徳に到達し、それを取捨塩梅することも出来ない。また生徒にとって記憶の便という点からも、基準となる内容を盛り込んだ教科書は是非とも必要である。（前掲『西村茂樹 杉浦重剛』58～60頁参照）
- 30 「小学校教則綱領」（明治14年・1881年）に修身科は「兼テ作テヲ授ケンコトヲ要ス」（『発達史第二巻』253頁）とあ

- る趣旨に基づいて編纂されたもので、初等科三年間用として用いられた。教師用教科書といった類いとみられる。
- 31 註(5)掲出書 197～8頁。
- 32 同上書 204頁。
- 33 仲新氏は、この時期に刊行された修身教科書を「嘉言集録型」「善行美談中心型（列伝形式も含む）」「嘉言善行録」という型（タイプ）に分類し解説をされている。（『近代教科書の成立』昭和24年 240～8頁参照）したがって善行美談を中心とする口授用の教科書も発刊されたのであるが、口授用の書籍、資料としては様々のものが用いられている。例えば明治天皇が、元田永孚に命じて編ませた『幼学綱要』（全7冊 明治15年）は「孝行」をはじめとする20の徳目のもとに『論語』を始めとする中国の古典からの嘉言と、日本や中国の例話を集めた嘉言善行併列型の、文章も極めて難解な教科書であるが、「宮内省下賜ノ幼学綱要ヲ各学校ニ頒布口授ノ用書ニ充タシム」（『秋田県年報』『文部省第12年報附録』260頁）とあるように口授用書として用いられている。また生徒の性質品評等「之ヲ帳簿ニ記載シ一ハ修身口授ノ参考ニ供シ一ハ試業ノ時ノ参考ニ供スルヲ要ス」（『修身課ノ一助』『東京茗溪会雑誌』1号 明治15・12 10頁）とあるように生徒の性質品評等が口授用の資料に供される例もあった。
- 34 『発達史 第三巻』40頁。
- 35 『文部省第15年報』『本省事務』16頁。
- 36 『千葉県教育百年史 第一巻』昭和48年 608頁。その他、例えば宮城県の場合などは明治20（1887）年5月の「通牒」前後の修身科教授方法の試みについて、ある教員は「講堂に於て実地児童に対し適切な事実の談話を演習」（『宮城私立教育会雑誌』19号）しているとか、「教育勅語」頒布前後にも「現今小学校ニ於ケル徳育ノ教授ヲ観ルニ……毎日三十分ノ談話ニシテ」（『宮城松華会雑誌』10号）と伝えられるように「談話」中心の授業が展開されている。しかし例えば明治22（1889）年6月15日、桃生郡の県当局への伺書の中に「小学科中修身科ハ用書ニヨリ格言(???)ヲ教授シ」（県学事文書『学校綴』明治22年）とあるように桃生郡管内の各小学校は修身書を使用していたようである。しかしこれは当時の主流ではなく例外的な事実とみるべきであろう。（『宮城県教育百年史 第一巻 明治篇』29頁参照）また栃木県下都賀郡においては明治19（1886）年頃に修身教科書の講読を廃止する動きがみられたというが（『修身書の講読を廃せんとす』『教育時論』37号 18頁）これも森文政の反映とみられよう。
- 37 「森有礼の思想と教育政策」『東京大学教育学部紀要 第8巻』昭和40年 2頁。
- 38 『発達史 第三巻』720頁。
- 39 「長野県年報」『文部省第11年報附録』369頁。
- 40 「福島県年報」『文部省第12年報附録』229頁。
- 41 「福岡県年報」同上書 430頁。
- 42 「旧長崎県学事景況 柳生寧成」『東京茗溪会雑誌』10号（明治16・10・20）48頁。
- 43 「埼玉学事 田中登作」同上誌9号（明治16・9・20）26頁。
- 44 「小学校教則課程一覧表之内一二改正之儀伺 明治十七年十月」埼玉県文書館所蔵資料。
- 45 「大阪府管下巡視中見聞セン学事ノ状況 安東清人」『文部省第11年報附録』46頁。
- 46 「鹿児島県学事巡視功程 吉村寅太郎」同上書 31頁。
- 47 「埼玉県巡視功程 野村綱」『文部省第12年報附録』639頁。
- 48 「福岡県学事巡視 佐沢太郎」同上書667～8頁。
- 49 「九州各県巡回の途次小学校における示諭」『森有礼全

集第一巻」宣文堂 昭和47年 511頁。

50 「閑議案」同上書 346頁。

51 教育五十年史所載貴族院議員法学博士木場貞長「森文部大臣の改革」『発達史 第三巻』31～2頁所収。

52 註の提出論文。134頁。

なお森は、身体能力の伸張という観点からも、儒教という学問修得にまつわる弊害を次のように指摘している。

「儒教ト俱ニ漢土ノ文字ヲ入レタルヨリ、其教ノ高尚深遠ナルハ姑ク置テ論セス、之ヲ学フニ要具タル文字ハ、初其形ヲ見テ之ヲ模スルコトヲ習フヨリ、後其義ヲ解スルニ至ル迄、刻苦勉勵過多ノ年数ヲ費サレハ之ヲ利用スル能ハス、故ニ之ヲ学フ者ハ概ネ身ヲ静座ニ沈メテ其健康ヲ損シ、借ムヘキハ到底柔弱ノ一書生ニ変ス、」(「身体ノ能力」明治12年10月『森有礼全集 第一巻』326～7頁)

53 「道徳教育ノ進歩セサルハ何故ソ 山城淀A・S・生」

『教育報知』87号(明20・10・8)11頁。

54 森文政期においても例えば明治19(1886)年7月刊『普通小学修身談』(阿部弘蔵校閲 丹所啓行 前川一郎同輯四冊)のように教師の「談話」用参考書といった類いの教科書が発刊されているが、修身教科書において検定制が実施されるのは明治25(1892)年以後のことである。

55 「尋常小学ニテ修身ヲ教授スルニ口授ト書籍ト兼ルノ得失」『教育時論』52号(明19・9・25)19～20頁。

なおその後、その「論題」に対して3編の「答案」が追加紹介されている。『教育時論』53号(明19・10・5)に掲載されているが、安芸山本泰次、陸中宮莊太郎、羽前猪獵山人の三氏によるものである。いずれも口授法支持論であるが、その論旨は次のごとく、ごく常識的なものと言うことができる。「尋常小学ノ修身教授ハ口授ニヨルヲ可トス若シ書籍ニ拠ランカ兒童未ダ文字ノ知識ナキ故ニ必先ヅ之ガ読ヲ授ケザルベカラズ已ニ読ヲ授クルモノトセバ少クモ教授時間ノ二分ノ一弱ハ必ズ知育ニ費スコトナルベシ徳性ヲ開拓スル貴重ノ時間ヲ以テ読ヲ教授ノ為メニ減削スルコト実ニ其意ヲ得ザルコト謂フベシ加之書籍ニヨル時ハ書中ノ談話ハ自ラ講義体ノ口氣ヲ帯ビテ平易簡明ヲ欠クノ恐アリ且脳力微弱ナル兒童ニ向ヒ文字教授ヲ併セテ徳性ヲ涵養スルコト能ハザルハ是レ多弁ヲ要セズシテ明ナル所ナリ」(22頁)。

なお修身科教授における口授法か書籍法かという問題は、尋常小学のみでなく師範学校や中学校のレベルにおいても問題とされたことであった。『教育時論』51号(明19・9・15)には「師範校中学校ニ於テ口授ノ法云々ニ対スル論議」との見出しで、福島東浜漁史、出雲の錦海釣士の2名の論が掲載されている。前者、東浜漁史の所説は次の如くである。

「師範校中学校ニ於テ口授ノ法ハ書籍的、説話的何レニ偏スルモ其ニ弊害アリト然ラバ其法如何ト云フニ余ノ実験ニ因レバ書籍的ニテ説話的ナルヲ可トス即チ教授スベキ事柄ノ題目ハ無論之ヲ塗板ニ明書シ其題目ノ下ニ教授スベキ事柄ノ綱領ハ徐カニ之ヲ書籍的即チ草稿通リニ口授シテ生徒ニハ必ラズ筆記セシメ然レ後チ説話的即チ演説風ニ從テ之ニ附符ス此附符シタル事柄ハ生徒ニ必ズシモ筆記スルヲ求メザルナリ蓋筆記ニ専ラナルトキハ充分ニ聴聞スルヲ得ズ充分ニ聴聞セントスルトキハ専ラ筆記スルヲ得ザレバナリ」(21頁)

書籍的、説話的のいずれかに偏するのではなく両者を適宜織り混ぜて口授すべしというのが東浜漁史の論旨であるが、一方出雲の錦海釣士は次のように書籍的口授よりも説話的口授の方が優ると述べている。

「説話的口授(談話体ニテ単ニ演説風ニアラズ)ノ書籍的口授(講義体ノモノ)ニ優レコトハ其觀念ヲ開発シ若ク

ハ其ノ感動ヲ惹起スルニ就テ予ノ実験スル所ナリ然レドモ元來教授ナルモノハ学問ニアラズシテ術ナリ術ノ巧拙得手不得手ハ人ニヨリテ同ジカラズシテ所謂大工ハ流流仕上グヲ見ヨヤノ言ノ如シ故ニ余強チニ限定スルヲ欲セザルナリ……然レドモ必ズ之ヲ限定セントナラバ余ハ寧ロ乙者ヲ採ラン而シテ其筆記ノ如キ必ズシモ口授ノ言辞ヲ一言片句モ遺漏ナキ様ニ——記スルヲ要セズ其要點ヲ摘記シ置ケバ充分ナリ」(21頁)

56 「道徳上ノ智識トハ何ゾヤ 在福島 青田節稿」『教育時論』118号(明21・7・25)10頁。

57 「徳育管見(承第五十七号) 小竹啓二郎」同上誌60号(明19・12・15)14頁。

58 「修身科口授 酒落生」『教育報知』94号(明20・11・26)7頁。

59 「開発的教授ノ景況如何。(郵寄) 大阪府 東区第三高等小学校 村村泰藏君。」同上誌130号(明21・8・4)5頁。

60 『弘前各尋常小学校來歴調』(弘前市立図書館所蔵)という資料がある。これは明治20(1887)年時に作成された記録で朝陽、大成、和徳、時敏、城西の各小学校について学事統計表が掲記されたあと「來歴及現時ノ状況」「学齡兒童就学」「学資」「学用品」「教員」「教授ノ状況并生徒奨励法」の見出し項目に沿って記録がなされている。これを見ると「教授ノ状況」についての記述は、各校とも心性開発主義への志向のもと各科教授の改良がはかれつつあることが指摘されている。文章は当初書かれたものが恐らく校長によってであろうか朱書で字句や表現の訂正が加えられているが、その朱で訂正された文を紹介すると、例えば朝陽小学校については「教授法ノ改良セン為ニ心性開発ノ主義ヲ執リ美術作文等ハ平易ニシテ適切ナル書ヲ撰ビ修身ハ行義作法ニ徳義上ノ格言事實ヲ難ヘ習字ハ大字并ニ細字ヲ練習セシム凡テ各学科共ニ心カヲ練磨シ官能ヲ発達シ後來実務ニ当ル可キ準備ヲ為サシムルヲ以テ目的トス」とあり、また大成小学校の場合も注力的から開発的への教授法の推移状況を述べたあと「修身科ノ教授ニ至リテハ科業中ノ最モ至難ナルモノナレバ未タコレヲ薫陶スルノ良法ヲ得ス随テ兒童ヲシテ充分ニ心性ニ感化セシメ徳性ヲ涵養セシムルヲ能ハサルナリ」と記されている。ところで森文相自身は「学科ノ教方ヲ見ルニ多クハ時間ヲ浪費シ前口上長キニ過ク、開発主義トカ云フテ斯ル弊ニ陥リシナルヘシ」「三重県下学事巡視中の演説 明治20年12月」『森有礼全集第一巻』604頁)と開発主義に因む教授の実態を批判した言辞はみられるが、後述する如く教師の感化、薫化、談話という方法を重視する立場、思想的脈絡において開発主義そのものには異論を挟む者ではなかったと思われる。

61 「巡遊日記 日下部三之介謹白。』『大日本教育会雑誌』23号(明18・9・30)109～10頁。

62 「修身科口授ニツキテ 増山久吉」『教育報知』84号(明20・9・17)8頁。

63 同じく和徳小学校関係資料に『記録簿』(全7冊)というのがある。毎日交替に巡視番の教員(2名)を定め、その者による校内巡視の記録で、意見等も時折記されているが、明治22(1889)年4月9日の箇所に「一週間授業予定書施行ニ付諸君ニ一言ス」と題して『週間授業予定書』施行の意義が次のように述べられている。「教授ノ術タル学校ノ一大事業ニシテ実ニ重要緊要ノ事ナリ若シ教授ニシテ不完全ナラバ教育上及ス所ノ弊害実ニ鮮少ニアラザルナリ元來教師タルモノハ常ニ能ク注意シテ教授ノ完全ヲ要スベキハ職務上徳義上止ムベカラザル事実ト信ス故ニ各科教授ノ術ヲシテ完全ナラシメント欲セハ問題ヲ精選シ充分ノ準備ヲナサマルベカラスはレ不完全ナカラモノノ予定書ヲ要スル所



似ナリコノ（書）ヤ頗ル繁ニ似タリト雖ル少シク勞セハ共効益亦尠ナカラサルベシ然ルニ人ノ業ヲ創スルヤ其初ニ当リ稍ヤ活潑ナル運動ヲナセズ事永遠ニ至ルニ随ヒ繁ヲ厭ヒ勞ヲ避ケ慢且怠ヲ生スルハ概ネ人情ノ常ナルガ如シコレ最も戒ムベキコナラスヤ余切ニ冀望ス若シコノ（書）ニシテ不完全ナラス益々改良ヲ加ヘ愈々完全ナル有益物ナラシメヨ徒ラニ勞ヲ憚リ無用ノ長物視スルナカラシムコトヲ」続けて「右ノ予定書ハ來週ニ於テ之ヲ試験セントス依テ問題選定ノ上ハ一応校長ニ差出シ閱覽ヲ受クル様ニシタシ」と施行方法を記している。なおこの『授業予定書』および『記録簿』については千葉寿夫著『小学校現場の百年』（津峰書房 昭和50年）にも紹介がなされている。（同書133～6頁、138～42頁）

- 64 註63掲出『記録簿』の明治20（1887）年10月13日の箇所に、巡視番三浦訓導による次のような意見が記されている。

「修身時間ニ於テ左ノ事項ヲ教誡スベシ

一 退下後生徒家ニ於テ復習スベキコト

一 衣服ノ美麗ヲ戒シムルコト

一 通路ニ於テ便所ニアラサル処へ小便ヲナサマルコト

一 通路ニ於テ食物ヲ食フベカラサルコト」

学校内外での日常生活上の諸注意が修身授業時にもなされていたことが察せられる。また同月15日の箇所（巡視番下沢訓導）にも「生徒ハ不必要ノ物品ヲ買求ムルノ弊アリ修身教授時ニ於テ訓誡アリタシ 但其買物ハ不用ノ紙類例へハ洋紙ノ反故不用ノ書類例へハ当時不用ノ本等ナリ」とある。

- 65 註63と同じ。  
66 「修身科教授。井本修三。」『教育報知』209号（明23・3・22）8頁。  
67 「口授ノ材料ニ就キ。篠島久太郎」同上誌239号（明23・10・25）15頁。  
68 一例として次表が掲記されている。

一月 三日歿ス	那波治所	天保 五年
一月 六日歿ス	佐藤信淵	嘉永 三年
一月十九日歿ス	荻生徂徠	享保十三年
一月廿三日歿ス	林 羅山	明暦 三年
一月廿五日歿ス	僧 契中	元禄十四年
一月廿九日歿ス	三宅親瀾	元文 六年

「修身口授の一法案」『教育時論』171号（明23・1・15）25～6頁。

- 69 『教育報知』112号（明21・3・31）、113号（明21・4・7）、114号（明21・4・14）に連載。  
70 『教育報知』156号（明22・2・2）8頁。  
71 註63と同じ。20頁。  
72 「児童ヲシテ学校ヲ信愛セシムベキ方法 茨城 郡司篤則」『教育時論』46号（明19・7・25）11頁。  
73 「小学修身教授法 広島県甲奴郡 K.N.」『教育報知』85号（明20・9・24）4頁。

- 74 「修身教授の一方便」同上誌131号（明21・8・11）17頁。

75 例えば明治25（1892）年に刊行された『尋常小学修身書』（東久世通禮）などをみると尋常科一年で使用する巻一は第十四課までは専ら画のみ、第十五課から画と大字の組み合わせとなっている。巻二以降は文章も次第に多くなるが随所に挿画がとり入れられており、10年代の文字文章主体の修身教科書とは著しい相違をみせている。（前掲『日本教科書大系 近代篇第2巻』参照）

- 76 「修身教科書ノ説 西村茂樹」『教育時論』204号（明23・12・15）9頁。

77 「修身課の教授は果して困難なりや 独尊居士」『教育報知』80号（明20・8・20）11頁。

78 「職業には一種の自尊心を要す（前号の続）」『教育時論』47号（明19・8・5）2～3頁。

79 註(4)掲出書「序」2～3頁。

80 註64と同じ。

81 「教育令ニ付意見」『森有礼全集 第一巻』339～40頁。

82 「埼玉県尋常師範学校における演説」同上書 481頁。

83 「第一地方部府県尋常師範学校長に対する演説」同上書 522～3頁。

84 「九州巡回中郡区長に対する演説」同上書497～8頁。

85 「福井中学校において郡長及び常置委員に対する演説」同上書570～1頁。

86 「京都府尋常中学校において郡区長府会常置委員及び教員に対する演説」同上書 589頁。

87 「三重県下学事巡視中の演説」同上書 604頁。

88 「修身配当ノ時間」『教育報知』94号（明20・11・26）10頁。

89 「校外教授論 在京都 和田嘉衛」『教育時論』61号（明19・12・25）8頁。

90 明治18（1885）年10月27日、新潟県明訓学校開校式において森は次のように演説している。「教室内ノ教育トハ学校ニ於ケル学問ナリ、教室外ノ教育トハ学校外ニ在リテ日ニ己ガ身ニ為スコト又或ハ起臥スルコトノ如キ皆是教室外ノ教育ニ属セリ、此教育ハ人生ノ教育中十分六ニ居リ、……然ルニ日本人ハ元來此緊要ナル教室外教育ヲ怠リ日常ノ万事ニ不規則ナルコト実ニ甚シ、……蓋シ人ハ十五六歳ヨリ十八九歳ノ間ハ最も大切ニテ、生涯ノ禍福ハ殆ト此時ノ教育如何ニ由テ定ルモノト云フベシ……是ヲ為スハ専ラ教員其ノ人ノ責ニ帰ス」（『森有礼全集 第一巻』472頁）

91 「児童ノ風儀ヲ矯正スルノ方按」『教育報知』45号（明19・11・27）13頁。

92 註63と同じ。5頁。

93 「修身科最良標品 南冥迂生」『教育時論』119号（明21・8・5）9頁。

94 「道德上ノ心意行作ヲ修練セシムル一方便 茨城県 萩谷孝之助」同上誌69号（明20・3・15）8～9頁。

（昭和58年11月7日受理）